

DANH



9

栄光学園蹴球部

9期 ~ 14期

DAKH

No.9

栄光学園蹴球部

も く じ

頑張ろうぜ！十一期	11期	宮坂研一	1
さようならブランドさん	10期	中前峻	2
この一年を振り返つて	10期	林茂	4
十三期生諸君へ	11期	小島四朗	7
ナイシヨバナシ			10
県下中学校冬期選手権大会	12期	樋口・伊東	11
◇作文集◇			15
11期 宮坂			15
12期 星野			17
13期 渡辺(浩)。青山。新井。戸田。中村。渡辺(幸)			18
14期 石井。加賀。岡崎。沖野。佐治。矢内。新倉。小菅。中村。吉川			25
喫煙室			33
くたばれ11期！	11期	たじまたくや	35
ヤア先輩			39
6期 石原			39
9期 大前。田畑。林。内山			42
キツエン禁止			56
これこそダツシユだ！	10期	中前峻	57
	11期	吉川威	59
随筆	10期	唯野英輝	60
	10期	町田晶生	61
丹沢遊びあるきの記	11期	成宮隆生	64
1960年度成績表	中学校の部		69
	高等学校の部		70

頑張ろうぜ！ 十一期

十一期主将 宮 坂 研 一

いよいよ我々十一期の時代になった。中三の時期くなく成績を上げられなかつた我々、サッカー部生活の楽しさを体験する機会の少なかつた我々。だからこそ今年は大いにサッカーを楽しもう。

去年の成績はとてすばらしいものだつた。その縁の下の力持ちとして活躍した我々が今度は縁の上の力持ちとして、部の立て役者となるのである。

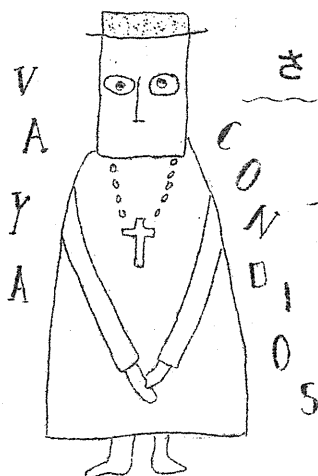
各々色々な夢を持つているだろう。「夏には関東大会に出て、冬には全国大会に、」等々。その夢を実現すべく努力しようではないか

過去において実現された事を、どうして我々にできない事があるのか。過去において実現した人たちもその時はK2であつた、十六才であつたのだ。我々も十六才である。やればできない事はない。

しかし、実現への努力、それは生まやさいものではないだろう本當につらいだろう。中学の指導の事も、そして勉強の事も考えてやらねばならぬのだ。今までの我々の持つ技術を考えれば本當にフアイトを持つて努力しなければならぬのは容易にわかると思う。

それには一人々々が自覚を持つてやる事、自分は伝統あるサッカー部の一員それも高校の最高学年である事を又試合の時は全栄光生を代表しているのだという事を忘れてはならない。

又、中学の指導はもつと大切な事であるから絶対におろそかにしてはならない。KOKO生の御都合主議によつて、楽しい中一、中二時代を無駄に過ごさせてはならない。我々のような学年を二度と作つてはならないのだ。よりよいサッカー部員、よりよい先輩となるように努力しよう。そして言葉だけでなく実行しよう。



さようなら

ブランドさん

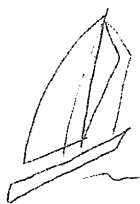
十期 中 前 峻

この二年間、私達を親切に導き又時には激しいFIGHTを植えて下さった良きコーチのブランドさんがこの度本国へお帰りになりました。今後は、移民関係の仕事に活躍なさるとの事です。

もうあの元気な「フアイト、フアイト」の声も聞けず、あの優しい笑顔をみる事も出来ないと、思うとともに淋しい気がします。

皆でブランドさんの御健康と御多幸を祈りましょう。そして、いつか、再び逢う事の出来る日が来る様に！

編集部



私が中三の時、そう、あれは私達十期生がそろそろ中学時代に終りを告げようとしていた頃のある日でした。新任の九期生の主将石原さんが、ドイツ風な、うら若い美しい髪と目を持った一人の青年を連れて来たのは。名前はブランドさんと紹介されました。私達のコーチとなる人だったのです。彼は何やら横文字で書いてある美しい、大分沢山サッカーの写真の載っている雑誌を持つて口もとに微笑を浮べてあいさつするのでした。そして一話すごとに、さもおかしそうに吹き出すのでした。彼は子供の時からサッカーをしている人でした。まだ日本のサッカーの実状をあまりよく知らないようでした。しかし彼は熱心に話しました。

。その内容は忘れしました。

次の練習日から、彼はグラウンドに現れました。だんだん皆と親しくなつて来ると彼は一人一人を君[〃]でなしに、名前で呼ぶようになりました。はすかしそうに。彼はますますあだなから覚えしました。そして細い注意をいくつとなく与えて下さいました。その年の試合には必ずみえて、御観戦になりました。その頃私達は彼の癖を発見しました。話しながら草をむしることです。彼は一人一人に、又試合全体を評しながら草をボリボリむしりとりました。もし県営グラウンドに草があつたら、ええ、彼は土を掘つたかも。いいえこんなことはどうでもいいのです。しかし試合前に彼の云うことは必ず「フアイトとダッシュ」でし

た。彼は生れつきこの言葉しか持ち合わせていない、というふうはこの二つの言葉を云いつづけました。しかし私達がこの言葉どうり戦つた時は勝ち、また実行できなかった時はきつと負けたのです。十期生が高二になつた時、彼もコーチ二年生になりました。日本語もぐんとうまくなりました。そして十期生は関東大会に出場しました。それが決定した日、湘南を破つて万雷の拍手を浴びてイレブンがグラウンドを走つてゐる時、彼の目にはキラリと光るものがありました。彼はうれしかつたのです。このイレブンが彼の云いつずけてきた二つの言葉を立派に果たからでした。私は彼を涙を二度だけ見たことがあります。一度はこの時、もう一度は、彼の出発の

日の朝、部室でブランドさん中に「螢の光」を合唱していたときでした。私達も少なからず甘酔つぱい気持になつたとき、彼の目は自分が育て、強くし、また強くならうとしてゐるサッカーマン達を見て濡れていました。

彼は行つてしまいました。遠い太平洋の大海原のはるかかなたのブラジルへ。もう二度と会えないこともあるかもしれません。しかし私達は熟して木から落ちた実のように、今度は自分で自分達のサッカーの土から芽を出すのです。唯、私がいつも残念に思うのは、一度も彼と共に私達が山へ行けなかつたことなのです。おわり



この一年を 振り返って

十期 副主将
林 茂

高校のはなやかな戦績にまさるとも劣らぬ活躍をし、秋には県下一位となり、冬の大会では準優勝をした中三の一年をふりかえってみよう。

中三が活躍する発端となつたのは夏休みの六角橋との試合だった。真夏の太陽が照りつけてはいたが、風のまた強い日であつた。正直のところ僕はまったく不安だつた。もちろん勝つてもらいたいとは思つたが決して勝てるとは言ひ切れなかつたからだ。前半は強風

のもと、風下に陣取つた。「前半持ちこたえれば」と思つたが、どうも気が晴れない。しかし、キックオフのホイッスルが鳴つてからは、驚くべきだつた。セリ合い、ダツシュに決して栄光は負けなかつた。バックスの鋭いつぶし、それにフォワードの速攻は、まつたく今までの栄光とは見違える程だつた。六角は細かい実にきれいなシュートパスを持つチームであつたが、

栄光のカットの前に何もなすことが出来なかつた。4対0の大勝であつた。各自が全力を出したのだ。久方ぶりの胸のすくような試合だつた。県大会棄権以来のうつぶんを全員がはき出しての勝利だつた。僕は試合前とは違つて足取り軽く、関東大会前の合宿に帰つ

たのだつた。

六角橋を破つてからの彼等は練習もぐつとしまつてきた。これから冬の大会はという気が出てきたのだろう。十月に片瀬と試合をすることにした。片瀬は県大会二位である。栄光にとつて、六角も片瀬も上位者である。しかし、彼等の征服欲、強き者への気迫は鋭かつた。片瀬との試合はそれを如実に表している。キック力において片瀬の右に出るチームはなかつた。栄光のバックにとつてロングキックで攻められるのが最も苦手だつた。ところがフォワード陣がよく助けた。相手がいくら蹴れると言つてもフリーで蹴らせなければ、と言つて中盤で必死のアタックをかました。攻めては守り、栄光にとつて一番つらい所であつた。

インナー及びハーフ陣は前半です
でに疲労が激しかった。しかしそ
の疲れた足にムチ打つて、後半は
さらに走りまくった。勝つまでは
、ホイッスルが鳴るまでは決して
休息を体のどこにも与えなかつた
。4対1で勝つた。六角橋に続い
ての快勝だった。

しかし試合後彼等の口に出た言
葉、それはよかつた、うれしいそ
んな言葉ではなかつた。「残るは
一中だ!!」常に高きへ……。これこ
そ彼等の心だった。自分より強い
者がいる以上それに勝たねばとい
う執拗な戦闘欲、これで彼等はい
つばいだつた。反省会の時、「そ
れじゃあ、近いうち一中に試合を申
し込もう」と言つた時、彼等の目
は光り輝いていた。

それから二、三週間たつた。一

中のグラウンドである。水色と緑の
両軍が試合を前にかいまわつてい
る。僕にはもう六角の時のような
不安はなかつた。しかしやはり勝
てるとは思いきれなかつた。ただ
彼等がどんなにリードされても、
またどんなにリードされても、最
後の瞬間まで全力を出してくれると
言うことを、固く信じていた。試
合は始つた。形勢まづたく互角。
一点先取すればすぐ返される。し
かし決して動揺しなかつた。一中
は夏の優勝チームである。栄光は
ただの榮權。しかし、今ではまづ
たく過去は問題ではない。問題は
一回一回のダッシュ、アタック、
セリ合いのみである。彼等は優勝
カップでなく、勝利の感激をめざ
して真剣だった。前半しらない間
に2点もリードしていた。後半に

なつても体力の差も何もなかつた
。ただその度その度のダッシュに
は、栄光が勝つていたのみである
。後半開始しばらくして、誰かが
敵のエースRIをスライディングで
すつ飛ばした。完全に一中の得点
源を断ち切つたのだ。ピッコをひ
きひきバックスにさがつた敵のRI
と、勝ち誇つた栄光イレブンの鋭
いダッシュとはまづたく対照的で
あつた。なにはともあれ、県下の
王座にたどりついた。

七、八カ月前の彼等を思い出す
とまづたく自分を疑いたくなる。
プレースキックも満足に出来ず、
バックスのシューティングなどは
お粗末なもの。笑わないで下さい
よ。まあ、とにかくインステツプ
の近くにあたつて、一応のスピー
ドをもつてゴールの方へ飛んで、

あるいはころがつていつたら、他の者から、“スゲエナー”と言われ、万が一、ゴールのバーを越そうものなら歓声があがつたりしたもんだつた。コンピネーションなどは、およそ縁も故もなかつた。その彼等に大きなシヨックがやつてきた。それは五月の対一中戦だつた。春の練習でどうやらチームの型がとれたので、ひとつ力試しに、とやつてみたのがその試合だつた。結果は1対2で破れた。この時始めて彼等は目が覚めたのだつた。いくら一生懸命走つても点が入らず、必死のスライディングをしてあとで必ず入れられた。一つの大きな出発であつた。自分達は弱いんだと思う事を皆が自覚した。県大会までその期間はない。とにかく基礎からやり直すこ

と、特にバックスの強化。これが目先の才一問題であつた。しかし僕にはこの敗戦はあまり大きなシヨックではなかつた。それは、彼等がフアイトでは負けていながつたことである。点差は開いたがとにかく最後まで全員が頑張つた。と。これが大きな希望であつた。あとはサッカーのこつ、要領を教えれば、という訳である。この敗戦からの出発、全員の努力が、十月の一中戦の勝利となつた訳だ。五カ月前にこの同じグラウンドで同じ相手に負けて意気消沈の彼等を起し、“県下一だ。一中に勝つた”と喜びあつてゐる彼等を見ると、強くなつたなあと、思わず感嘆せずにはいられなかつた。そしてまた、敗戦から立ち直つて見事県下一となつた彼等の努力、フアイトに

心から拍手を送つてやりたい。しかしこの中三も希望の冬の大会では優勝できなかった。準決勝までは完全に実力の差を見せて、これとは思わせたが、またもや一中にやられた。皆の気力の充実、チーム力から考えてみても当然に勝てる試合であつた。しかし試合は計算どうりには行かないもの。一とは言つてもけしてダランのない負け方ではなかつた。後半三点もリードされても望みを捨てることなく、最後までネバリ、一点差にまでこぎつけた澁とさは、大いに賞讃に値するものである。

冬の大会こそ優勝できなかったが、とにかく立派な成績だつた。この好成績の原因を考えてみると、それは、試合におけるダッシュ

十一期
小島
四朗

の最高学年となり、榮光学園中学
校の代表となるわけである。それ
ぞれ君達、自分自身希望に胸をふ
くらませてゐる事と思う。その一
つにはきつと、県下大会で優勝し
てみようとしてゐるだろう。実
現高二（十期）以来その優勝を逃
してゐるのだから。部屋に再び優
勝状を飾つてみたいだろう。

「蹴球は一つの不滅の鉄則がある。出来るだけはげしくプレイし、最後の瞬間まで努力せよということである。スポーツマンシップを守つて最後まで奮闘し、しかも敗

その一〇

サツカーは個人プレーだけで成り立つスポーツではなく、チームプレーを必要とするスポーツである。そんなことはもうわかりきつてゐるよ、などと思つてゐる人が、きつとゐる。ボール一つは皆を動かし、又皆はボール一つのために動く事が必要とされる。一組になつてサイドの時、その中からボールが外へこぼれてしまつたとする。それはパスをした人、及びそのパスを受けた人だけの失敗ではなく、そこには連帶的に間接な責任が生じてゐるのだ。だからその組

のハタも全部その球を追いかけて、パスをうけて動く事は練習中絶対に必要な事である。それはチームワークを作るだけでなく、コンビの練習にもなる。一人一人がその円を作る上に於て、欠けてはいけない一人一人であり、又その円を動かすのには一人が動かなければ皆がうまくまとまて動けないのだ。君達は色々異つた小学校から栄光に入学してサッカー部へ入り、得たものは多分いろいろあるだろうが、その一つとして何でも話せる友達を、又全く知らなかつた友達と口をきく事が出来るようになったと思う。そして二年間、二十八の大世帯となつた。もつと君達はうまくなるとまれると思う。

その二 練習方法

基礎技術のマスター

中学生の技術として小細工など修得に努力し、それを身につけることより、むしろ本当の基礎技術をマスターした方がより良いと思う。

- (1) サイドとインステップ
- (2) ヘッディング
- (3) トラップイニング

この三つは必らず中学三年の間に身につけるべきだ。わずか一月余りの君達に対しての指導日誌の注意は、たいていのものがK Eの悪さを指摘したもの、つまり、サイドが悪いとか、フオームが出来ていないというものであることをこゝに示しておく。林さんの経験によると、中学のサッカーの才一は走ることに、才二はサイドの正確さ、才三はヘッディングの修得だということだし、又他の多

くのハタもそうだと断言出来ると思う。

次に練習方法について気がついた事をあげてみたい。先ず君達は自分達から積極的に練習する態度を身につけてほしい。一時から練習が始まるとしたら、少くとも、特別な用事をのぞいて、十分或いは十五分前にはグラウンドへ出てほしいと思う。そして練習中は個人主義で、利己主義でない、自分を大切にしていよと思う。だが、これは自分勝手な行動を意味するのではない、決して。不必要な、練習に全く関係の無いくだらん話は、なるべく慎しむべきだと思ふ。軽く心の中、口の中でリズムをとるくらい事は別段どうこうとは言わない。それともう一つ、笛には必らず忠実であること。笛が

「ビー」と鳴つたら、いついかなる状態が生じていたとしてもだんだらしないですく集まる事を心にかけてほしい。これは私が君達を指導していく上において最も必要な事だ。そして集まつて次の動作に移るまでは、なるべく機敏に動いてほしい。

その三

君達はフアイトがサッカーには絶対に欠かせないものであるという事を知っている筈である。私は君達を初めて指導した時、フアイトを持つてゐるのかいないのか、サッカーをする気があるのかないのか、迷つた事があつた。君達は溫和しい坊ちやん育ち（ある一部の者をのぞいて）の感が多分にする。部生活をする上には、坊ちやん育ちから一步前進して、皆とう

ちとけることの出来る荒々しさを持つことが大事ではないか。何もごつつくいかれというのではない。明るい、活気のある少年の集まりがサッカー部の現在なのだから。練習中にはそれを声に出す事に心がける事。一人が声を出したら皆も出す様に。こつちから声をかけたら、必ず声を返す様に。声を出してもへるものでもないし、又練習中恥かしい事など少しもない筈だろう。自分からいゝと思つた事は、どんなに小さい事がらでもそれをやり通すという自覚を持つとう。負けるものか、という気持はきつと何かを生ずる。

その四

気づいた点だが、中学生の練習は一年、二年、三年と学年別の練習で、一年から三年まで、人数が

多い事からかも知れないが、ものつながりやすいのではないか。下級生と同じ電車を通つてくる人が多いと思う。そんな時、顔を知つていたら話しかけてみるのが良いだろうと思う。又、上級生に対しては、絶対にバカにした様な口をきいてはならないと思う。練習中は絶対服従してもらいたい。練習をやる上に於いても、チームをまとめるのにも大切であるからだ。だが、休憩の時や、帰りなどでは対等に話しかまわれない。ざつくばらんにしゃべりたい事をしゃべり、話したい事を聞いてやる気持でいゝと思う。その時にはみんなで笑い、楽しむ、部生活の楽しみがあると思う。部活動、これは上級生と下級生を結びつけて親しくする最大のものである事を忘れ

ない様に。つまらん事を書いてしまつたが、中学三年としてのサッカー部の生活を最大に活用し、エンジョイして皆と共に行こう。

次に君達へ 武者小路実篤より

- (1) すぐれた人間は、いざという時が来ないでも、いつも全力を出して仕事をしている。
- (2) 泉は流れる所を知らずにあふれ、鶏は卵を生んで、生んで齡とつてゆくのだ。
- (3) 誰にも喜ばれず、認められないでも、仕事をこつこつするのは楽しいが、自分の知らない所で、自分の尊敬出来る人々が自分の仕事を見て喜んでくれることを思うのは楽しいものである。
- (4) 積極的に自己を生かすこと

意心がけ、難関にぶつかつてもそれを打ち破り進む勇気を養い、来るものはおそれず、自分のすることを毎日する方が賢い。

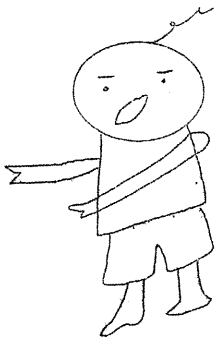
- (5) 前進、もう一步、もう二歩、もう三歩だ。

- (6) 本気にならないと生きられない人間は見えていたまいが、感心しないわけにはゆかない。力のありあまる人間の本気な仕事は見ると凄い。そういう仕事を自分は尊敬する。

ナイシヨ バナシ

中一の五君、ゴシユミは流行歌

をウナル事。今日も今日とて「パバになるウならア、今アいちイデオー」と御気嫌。ハテ、聞いた事のない歌詞だが、と尋ねてみると、彼氏、「まゝになるなら」のまゝはママ、即ちお母さんだと信じ込み、お得意の変え歌にしたのだそうです。嗚呼／＼。



県下中学校冬期選手権大会

Dec 26-28

— 藤沢県営グラウンド —

12期 樋口
伊東

昨日の雨で練習が流れて今日の天気も心配されたが、カバリと晴れて絶好のサッカー日和となった。形ばかりの入場式が終つて11時30分試合開始。相手の岡中はキツクカもなく栄光の一方的な試合となつた。しかし栄光も昨日練習がなかつたのがたたつたのかまつたくなので一向に点が入らない。まつたくやきもきする。負ける心配はなくともこのまま永久に点が入らぬような気さえした。しかしようやく前半もそろそろ終りに近い頃越智のはなつたユルイゴロのシュートがグラウンドの悪いのも手伝つてうまきまつてくれた。もう安心、これで抽選負なんて事はない。しかし前半はたつたこの一点で終り、まつたくこれから先が思いやられる。しかし後半に入ると栄光はうまきパスを通し、佐藤、横川等が4点をたたき込んで結局5-0でタイムアップ。今日の試合では、中二の渡辺のフアイトあるブレイがめだつたのみ。まつたくなよりなき限りであつた。

才二戦 吉浜中

小春日和の暖い日ざしが、クレイのグラウンドの霜柱を溶かし、まるで田んぼのようになつたぬかるみの中で試合開始。パスは好調に通るが、かんじんな所で足をとられて中々点が入らない。しかしようやく15分越智が昨日に続いて先取点をあげ、さらに20分高野がうまき決めて2-10と前半リードをうばう。後半もフアイトを失つた吉中を攻め続け、横川村田等がさ

らに4点を追加し6-0と楽勝した。

準決勝 対片中

準決勝の相手は始めの予想通り片中だった。片中には秋に4-1で快勝しているが、彼等も秋から相当のびているので油断はできない。殊にエースの六番のロビンや11番久保田ダッシュの真横からきれいに上るセクターリクス等まつたく恐るべきものである。試合は待望のローンのグランドで行われた。昨日おとといとどろのグランドになやんで来た栄光にとつてはまるでうそみたいに球がかかる。仲々好調にパスがまわるが、さすがバックスのチームで栄光も仲々攻めこめず一進一退の好ゲームとなった。しかし十五分越智がうま

くボールをキープし敵のバックスをたくみに抜いて独走、あの例のゴール前でぐぐつと落るすばらしいシュートをきめまず一点先取。さらに二十分横川がゴール前の混戦からうまくおし込んで二点目をあげた。これで前半終了。後半波に乗った栄光は片中バックスのキックを封じて攻め入るが仲々点が入らない。しかしRW村田のパスを受けた越智が又もやシュート。これが運よく敵バックスにあたつてゴールイン。遂に三点目をあげた。その後もせめつけるが追加点なくタイムアップ。片中にはこれで秋に続き二連勝した。

決勝 対一中

午前中の好天気はどこえやら、どんより曇つた冬の空からは雪さ

えちらつきだした。いよいよ一中と決勝だ。一中とは春に一敗秋に一勝と一勝一敗と星を分けている。我々は、夏以来今日、この時をめぐらしてガンバツテ来たのだ。試合開始の相図と共に栄光は一中陣内になだれ込み押しに押した。しかしOF横川のシュートがはずれたのをきつかけに似ているユニフォームを見分ける為に一中の選手にゼッケンをつきさせた。このロスタイムがひびいたのかその後一中の速い攻撃に栄光押されぎみ。そのうちにブラジルから来たという例の五番のものすごいシュートにムーチンのセイビングもおよばず遂に先取点を許した。しかし又栄光押し返して攻め込むが中央から割つて入ろうとする為五番にはばまれてうまく行かない。この間にゴ

対一中戦に思つた事

十一期 伊東 一雄

おい込み鋭く一中を攻めたて、²⁰分高野が左から割つて入りシュートをきめるゝとせまつた。しかし遂にタイムアップ。敗けたのだ。こんなに押していながら、ぐつと何かがこみ上げて来た。ええい残念！とうとう優勝を以した。

閉会式、又もカップは一中の手に。岩淵さんの講評「栄光は粒がそろつていて力は勝っているように見えましたが。しかしいらぬ所で力を入れすぎているようでした」と。又林さんも言つた。「勝負とはこんなものだ。力の勝つたものが勝つとは限らない。皆もこの負けから種々学びとろう」と。そう

だ我々は、この一中戦の経験を生かしこんどこそ勝つのだ。我々はまだ若いのだ。先は長い。大いにフアイトをだしてガンバロー。

いよいよ県下分け目の栄光対一中戦が始つた。僕達の練習の成果が実るか否かを決する時がきたのだ。準決勝対片瀬中の時は結構疲れていたが、今はさほど彼れているとは思わむかつた。それもそのはず、昼飯におにぎり三個、クラツカー二個、パン二個を食べたんだから。

僕は絶対に一中のRI(8)をマークしなければだめだと思つていた。しかし、始まつてみるとこれがおろそかになりがちであつた。というのは僕が攻撃に重きをかけて守りをしなかつたためだ。先取の得点は一中のRIのパスかららし

ール前を球が横ぎつて絶対一点のチャンスをはたりして栄光は決定力に欠ける単調な攻撃をくり返すのみで一かな得点できない。そうこうするうちに又一中のあのなだれのような速攻にあい11番のシュートを許しついに二点のリードをうばわれて前半終了。後半栄光は、ばん回しようと思死にせめこむがやはりうまく行かない。更に又五分5番の上げたロビングをFBとGKコンビの悪さから8番につっこまれてとうとう3-10とはなされる。しかし栄光はこれでもフアイトを失うどころかますますフアイトをだして攻撃する。そしてとうとう十五分高野からパスを受けた越智がドリブルして左から逆のボールギリギリにたたきこみ待望の一点を上げた。その後栄光、

い。僕のマークがおろそかになつたからだろう。この一点に栄光はガクツときたらしい。オー僕がそうだった。今までの試合は皆栄光が先取点をあげて気をよくしてしたのに、今度は逆になつてしまった。又一点取られた。これは怪人が手まで使つて必死に防いだがゴール。インしてしまつた。これで又ガククリきた。後半、またもや一点入れられた。これでいよいよガククリきた。見ていた者の話しによるともう完全に負けだと思つたそうである。しかし栄光フアイトを出した。遂に得点をあげた。万才。いよいよ勝てそうに思われた。又、栄光得点してるゝゝになつた。応援している者の話しでは、もう五、六分しか残り時間がなかつた

が勝てそうに思われたそうだ。栄光も必死になつてシュートしようとするが敵もさるもの必死になつてスライディングをして防ぐ。応援の者も必死だったそうだ。「ピーー。」遂にタイム。アップ残念無念。負けたのだ。優勝できなかったのだ。しかし、この時はあまり残念とも思われなかつた。表彰式で一中のキャプテンが優勝カップを受け取つた時に「優勝できなくて残念だ。」と思つた。又、指導してくれた林さんに対してすまないと思つた。この時に一番残念に思つた。僕は達はこの決勝戦に負けたのだ。けれども僕は全力を出してこの試合に打ち勝つたのだ。一中は我々より役者が一枚上だったのだ。今までの練習の成果は優勝

こそ出きなかつたが、県下二位という地位に実つたのだ。僕はこれで甘んじずに高校に行つたとき全国大会に出場できるように努力しよう。又、来年こそは、三期生の者に夏、冬の両大会とも優勝してもらいたいものだ。

終り



私とサッカー

十一期 官坂 研 一

才一期 何も知らぬ期

一小学校

私が小学校の時知っていたスポーツの名は、野球、相撲、テニス、スケート、スキー、柔道ボクシング、レスリング、陸上そして、ドッジボールくらいなものである。野球はバットで小さい球を打つ、ソフトも同じ、バレーは手のひらだか、げんこつだかでボールをはじく、相撲は太つちよなやつがとつ組合つて倒れた方が負、テニスはもちあみに棒のついたようなので小さいボールを打つというくらい。の事を知っていたにすぎない。勝負のつけ方を知っていたのは

野球と相撲それにドッジボールくらいなものであつた。

つまり私は運動のからきしだめな典型的な秀才タイプの生徒だつたのである。ドッジボールの試合を三十回して一回ボールを受け取れたと喜んで方である。ついでに、月に一回以上学校を休まなければならぬような弱い体の持ち主であつたのだ二栄光入試

入学試験の時、雨の降る日に広いグラウンドの真ん中でシャツと短パンツ、色がわりの長くつ下(ストッキング)で数人があつちへ行つたりこつちへ来たりしていた。何をバカげた事をしているのかと思つた。タインをしていたのだ。

三人学

確か入学式の日である。講堂の入り口に

「新入生歓迎蹴球大試合」とポスターがはつてあつた。母に「蹴球つて何か」と聞いた、母も知らなかつた。

この頃大先輩内山さんがサッカーというスポーツをやつていて私を引張ろうとしているのを知つたが、キッカーとは蹴球であるという事は知らなかつた。

才二期 ようやく知り出す期

一学期のスポーツ大会級長にどうしてもサッカーに出なければならぬと言われて断わり切れずにやつた。もしここで断わつていたら今の私はないだろうこのスポーツ大会ですつかりサッカーが好きになつたが、夏休みになつても足が痛くてしか

たがなかった。

才三期入部

一、入部願

私はバレー部に入る事にして入部願いはバレー部しか書かなかった。しかし村田先生にサッカーを勧められた。野球部長の村ツチャンが野球部をけなしてサッカー部を勧めた。前からサッカー部に入りたいとは思っていたが体が続かないと思つたのでやめたのであるが組主任に勧められて又入る気になつてとうとう母を口説いて入つてしまった。(体がなくても十分続けられる証拠。)

二練習

東郷さん(先生の弟)に呼び集められ、高校校舎前のロータリーにすわらせられ、キャップ

テンの話を聞いた。いつもニコニコとしたやさしそうな人だった。

「僕の姓は佐々木、字名「よじろう」ていうんだよ」

ととてもにこやかに話した。キャップテンとはとてもカンロクのある人だなと思つた。

その日は大先輩であるという「エバラ」という人がコーチであつた。どんな事をしたやよく覚えていないが、プレイスキックで足をいためて半年いたかつたのを覚えてゐる。

エバラさんの胸が長い事もちの時発見、エバラさんの重心は地面の中にあるから絶対に倒れないと教わつた。

以上の事がサッカー部に入る

までの事である。サッカーというスポーツは、スポーツの中で特に面白いスポーツ、男性的紳士的な立派なスポーツであると確信している。中二諸君を榮光において、特に楽しい立派な部であるサッカー部、スポーツの中で特に楽しい立派なスポーツであるサッカーを多いに楽しんで下さい。

十二期生の学問と

サツカ

◇作文◇

十二期星野 崇

Kaijin

ある日、天狗さんが朝礼の時に言われた。「とにかく七点も八点も下つた者もおるんだ。いくら県下一になつてもね、こんなことじやしようがないと思うだ。」俺は今でもはつきりと覚えている、その時の口惜しさを。

まあ、確かに俺達十二期生は余り勉強しなかつた。しかし、俺達十二期生には頭の優れた者が多いいやみんなそうかも知れぬ。他の学年の方はどうかよく知らないが。俺達十二期生には勉強する暇がある。それは確かだ。いくら、練習が多く、いくら疲れたとはいえ、いくら日曜日がつぶれたとはいえそんな理由で勉強が出来ない

なんちゆうのは、けしからんし又我がサツカー部の恥である。何時でも実に暇な時がある。そりや休養も必要だ。しかし、勉強の時間までベチャくちやしやべる必要はないと思うんだ。もちろん、極く限られた者も一生懸命勉強して成績を上げようと努力しているのがある。しかし、勉強の為のほとんどの時間はその他のおいどんも入るかも知れぬが、邪魔をしているようになる為、有効に使えない。大体み、オナス位とつてね、ろくろく勉強もせずベチャクチヤしやべつて他の人の勉強を妨げるといふのはけしからんよ。又、勉強をしないものがある。重要だといふことは知つていても、ついついやらずに済ますのがある。又、勉強全然せぬ奴がいる。

俺は勉強とスポーツを両立させたい。俺は懸命にサツカーをするユース。サツカーにでもオリンピックにでも出たい。又、俺は懸命に勉強をする。ノーベル物理学賞位もらい、日本の生んだすばらしい偉人になりたい。勉強に自信をなくしているものよ、勉強のきらいなものよ、一度よく考えてくれサツカーに於ても、始めは下手だつたが、そのうち素晴らしく巧くなつた。それは勿論毎日の練習のたまものである。勉強に於ても毎日毎日努力すればオナス位へのかつばだ。偉大な発明王エジソンは言つた。「天才とは99%が努力で、1%が靈感である」と。まさにその通りだ。遺伝だから仕方がないなどと言っている愚か者よ、落胆することはない。努力すれ

ばサッカーだつて巧くなるし、勉強だつて素晴らしくなる。我々少年十二期生は明日への希望を抱かなければならぬ。我々少年をスポーツをしなければならぬ。クルートルタン男しやくが変な事を言つたが、あんな事は愚のぐつちよで見習う必要はない。大体、スポーツから勝敗を取つたものは実に無意味なものである。スポーツは勝つ為にあるものである。負ける為にあるものではない。それと同じである。勉強に於ても、負ける必要はない。勝たねばならぬ。ある男が言つた。Time is money
まさにその通りである。どうだい十二期生諸君、ベチャクチャしやべらずに懸命にやろうではないか。無駄な時間を作らず、24時間とちよつとを毎日毎日有効に効果的

に生きようではないか。ファイトを燃やして、高校になつた時に全国大会で優勝し、勉強に於ても各自が素晴らしい成績を上げたたら、栄光の天狗どころか、天狗山の犬天狗だつてびつくりするぞ。いつておくけど、これは不可能な事である。どうだい、じやんじやん張り切つてやろうではないか //

All things are difficult before they are easy 一事もたやすくなるまでむずかしいものである。

Without labor nothing is to be got away men 一人は勤勞なくしては、何事も手中に収める事を待たず。

The word impossible is not in my dictionary 不可能なる文字は余の辞書になし

Genius is fostered by industry
一天才とは勤勉により育成されたものである
Nothing is easy to the unwilling
—やる気のない者にとつて、易しいものは同一つない。

◇ 作文 ◇
中二のインチキ
サッカーのこと
十三期 渡 辺 浩

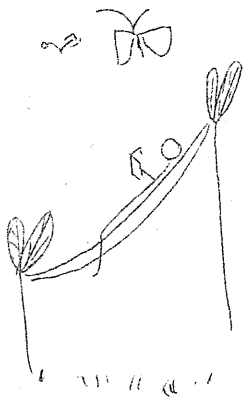
現在、中二のサッカー部のほとんどは、休み時間に、庭球を使つてサッカーと称するものをしていゝる。場所は、中学校校舎の西側の、割合ひろい所である。そこへは校庭のすみで、後は海である。以前は同じ場所に集つて話したり、ぶざけたりしていたのだが、二期の中頃からこれを始めた。ゴールは非常口のドアで、フォワード、バックは大体、本当のフォワード、バックでわかれる。そして、フォワードがその非常口にボールをけつてぶつけければフォワードの勝ち、遠くにけり出せばバックの勝ちとなる。又、横にボールがでればスローイングをし

キーパーが一人いる。しかしこんな規則は、あまりはつきりしていない。

このサッカーでも佐藤や青さんは上手で、佐藤はそのキックで非常口の横のガラスをぶちわつたことがある。又、青さん達バックはどんどん外にけり出すので、今までにぼくの知っているだけでも五個ぐらいのボールが海に落ちたまゝ取れずに、なくなつてしまつた。

又、このサッカーの特長として非常に乱暴である、ということがある。ボールがゴールの前でころがったりすれば、わつしよいいわつしよいと押し込んでしまう。その為この間、非常口のドアの板がわれてしまつた。そして人数が多いので以前そこで中三が野球

をしていたのだが、いつのまにかいなくなつてしまつた。又、みんなからぶりばかりしているくせに大きく足をふりあげて力いっばいけるので、足に小さなあざを作つたりするのはしつちゆうである。そしてけがの決ま版としてこの間、太田の爪がはがれそうになつてしまつた。太田がキーパーをやつてゐてボールを取つた時手をふまれてしまつたのである。こんなに危険な所もあるが、なかなかおもしろいので、今も盛んにやつている。



◇ 作文 ◇

サッカー部に入つた時とその後の事

十三期 青山明夫

ぼくは吉川さんに「ダツシュに載せる作文を書いてくれ」と言われた時、まず「題」を考えました。なぜかと言うと「題がなければ作文が書けないからです（シエイクスピアが言いました）。ですからない知恵をしぼつて懸命に考えました。その結果ぼくは始めて「ダツシュ」に作文を載せるのだと言う事に気がきました。「ダツシュ」はサッカー部の部誌です。だからサッカー部について書いたら良いと思ひました。そしてその通り実行することに決定しました。だからぼくは、これからサッカー部についてつらつらと考えながら書き

つづつて行きたいと思ひます。

まず常識的に考えますと、ぼくがどうしてサッカー部に入るはめになつたのかを書くのが順序だと思ひます。だからそれについてこれから書きます。

ぼくが栄光に通ひ始めたころもサッカー部はあつたでしょう。だから当然練習したでしょう。だから当然ぼくはサッカー部の練習風景にお目にかかりました。それで最初は「きたないな」と感じただけでした。ところが(多分現高一が夏の大会にそなえて練習していたんだらうと思ひます)ある雨の日、海側のゴール前でサッカー部員がそれこそ泥まみれになつて雨にも負けず風にもまけず(風はふいてなかつたが)ガンバッテ練習していました。

その時「サッカーてのは勇ましく

て、男らしいスポーツだなあ」と感じサッカー部に入つてサッカーをやりたいなと思ひました。さいわい父母は「やりたいんならやつて見ろ」と言うのでますます入る決心をしました。又同級にワンチャン、佐藤(純)、ジョージ等の諸氏がいて、彼らがつちり手を組んでいて、楽しそうなのを見ているので、ぼくもあんな仲間に入つて見たいと思ひ、ますますさへにサッカー部に入りたくなりました。しかし、しかし、ぼくはその時すでに物理部化学班に入つていた。従つて二年にならなければサッカー部に入れない状態であつた。化学の方にもみれんがあるの、はやる心をおさえて二年までがまんしました。さて三学期の終りごろ(はつきり覚えてない)入

部願を出して期末試験のつた日始めての練習に参加しました。(希望に胸をふくらませて：)しかし、それまでスポーツらしきものはほとんどやつていないのもうそれはそれは目もあてられないほどくたびれました。栄光から田浦駅まで歩くのがものすごく長く感じられました。そんなふうでしたから、次の日からの練習は休んでしまひ、サッカー部に入つてやつて行けるかと心配になつてやめようかと思ひました(初めの決心はどこえやら。。。)。しかし入つてすぐやめたなんていうのは恥になると思ひしばらく留る事にした。しばらく続けていたら、練習のたんびにくたくたにはなりますが最初ほどではなく、行き帰りの部員どうしのくだらない話がたまらなく楽しくなつて、「やめる」なん

て事は考えもしなくなりました。もちろん、技術的な事に關してもだんだんと上手になつて行つたように思われました。ジョージ、佐藤、太田さん達から「ああしろ」「こうしろ」とうるさくもあり、ありがたくもある指導を受けて、自分なりに一生懸命やつたせいだろうと思つています（自分で感じているだけです。。。誤解しないで）。しばしばスランプのようなものも、ありましたが、まあまあ現在まで毎週火曜、土曜に練習してくたびれて、毎日くだらない事を話しています。奨来も（栄光を卒業する日まで）これを続けて行くべし。。。エー以上真にくだらけな事を、つらつらと書きならべて来ましたが、最後までがまんしてお読み下された人に対して、感謝の意を表するとともに、厚く御礼申し上げる次第でございます。

人間を造る

◇作文◇

十三期 新井 正夫

一年前、僕はサッカー部と關係

はなかつた。一年は十二ヶ月、そして三百六十五日だから、三百六十五日マイナス？日前にサッカー部に入つた。この時は、全然サッカー部に入る気はなかつた。友達にすすめられて、何とはなしにボートと入つてしまつた。ボートと入つて、ボートと出ていけばオバケだ。僕はオバケではないから、何とか一年間部に居た。

入部した時は、希望というものもないし、目的もなかつた。なんとなくいいものがある気がした。しかし練習しておどろいた。すごく激しいのだ。特にランニング、ヘッディング等は辛かつた。全く

ゲンメツを感じ、部をやめようと思つたことがあるが、やめなかつた。やめたら恥になる。サッカーに負けた事になると考えた。たとえば、どんな考えからでも良い、サッカー部にとゞまつたのは良かったと思う。勿論これには先輩や、同期生の忠告や励ましがあつた事は、いうまでもない。先輩の中には、全く嫌な奴と思つていた人もいた。けれどその人達に接してみると、けつこう良い人達だつた。かえつて尊敬する様になる事が多い。

練習が激しければ、少しづつでも上手くなつてきた。先輩、同期生とも仲良くなつた。色々なことも覚えた。数学をやつていたので、二年では倍だけ良くなる。単利

でさえも倍以上だ。複利だつたら
どうなるだろう。

くだらない事を少し書きすぎた
から、この辺でやめる。我々も中
三になるつもりだから頑張る。専
任指導者も、太田さんから小島さ
んに代つた。我々も新しい出発点
にたつて、人間の完成に近づきた
いと思う。

◇ 文 作 サ ツ カ ー 魂
十三期 戸 田 忠 澄

僕は二学期に入つたばかりのほ
やはや部員である。まだ部員では
なかつた頃、僕は雨の日でも、風
の日でも、若いエネルギーを暴発
させているサツカー部をうらやま
しく思つたものだつた。もともと
どこかで思いつきりあばれてみた

いと思つていたのだから、自然興
味がわいてきた。一つのボールを
追つてくたたくたになりながらも、
なおグラウンドを駆け回るのがすぐ
に好きになつた。そこで入部した
わけである。

僕はまだサツカー部員としても
ゴールキーパーとしても未熟者だ
が、人一倍のフアイトは持つてい
るつもりである。技術よりもまず
フアイトである。たとえ技術がま
ずくてもフアイトがあれば、その
プレイはすばらしいものになつて
くるのだ。たとえば、うなつて飛
んでくるたまに夢中になつて飛び
つくフアイト、それがあれば何で
もできない事はないと思う。
よくサツカー部は野蠻だとか言う
声を聞くが、そんな人にはサツカ
ーをやる者のフアイトがわからな

いのである。若いエネルギーを暴
発させるフアイト、それがどんな
に素晴らしい物か、彼等にはわから
ないのである。しかし、わからな
い者はそれでいい、我々は我々で
フアイトを全部暴発させて、グラ
ウンドでボールを追つかけるのであ
る。

今年の中三という中学の最上級
に達するわけだが、その心がまえ
を一言書こう。まず中三になると、
栄光の中学の面目をかけて対抗試
合をするのである。初めて試合を
した時は、まだサツカー部に入つ
たばかりで全々自信がなかつたが、
とにかくぶつつけ本番でやつてみ
た。が、どこかで失敗するのでは
ないかと、内心びくびくしていた。
今度からは、一つ一つの練習に
もフアイトを持つてあたつて、数

々の試合の後には、その試合の失敗、成功を反省しさらにそれらを積み重ね、次の試合にはより良くプレイできるように心がけるつもりである。

ゴールキーパーはゴールを守っている最後の守備である。そのため時には一点とられるのを防ぐために危険さえもおかす事がある。しかし、キーパーの一つのミスが選手を落胆させ、さらに負けに導く事もある。そのためキーパーのゴールの守備というのは他の選手に比べて比重が大きくなってくるのである。

それでは、今までのゴールキーパーはどうしたであろう。彼等は皆りっぱにその任務を果しているのである。彼等がそれを果しているかぎり、私にできないことは、な

いはずである。きつと多くの苦難が待ちうけているだろう、しかし僕は栄光の十三期のゴールキーパーとして、先輩の跡をたどつて、彼等に負けない所まで行くつもりである。

ーオフリー



モハン(ツディンク)

スタイル



ランニング

十三期
中 村 光 世

「あと一周ぐらいかな。もう無意識で走り続けている。」

しかしまだ笛はならない。額には汗のかたまりがこびりついてはならない。

太陽が沈んで寒いはずなのに体は、ぽかぽかしている。しかしみんなファットをだして、落伍者は一人もいない。

誰か「ファイト」と叫んだ。反射的に「よし」とでた。もう何も考えられなかつた。「ピイツ」みんな走るのをやめて丸をつくるため散らばつた。



県大会に出場して

十三期 渡 辺 幸 男

神奈川県冬季サッカー大会は、二十六日から三日間、藤沢県営グラウンドでおこなわれましたが、ぼくも、栄光チームの一員として出場しました。

才一回戦の対岡村中、二回戦の、対吉浜戦は、五対〇、六対〇と、なんなくうちやぶつて勝った。

二十八日は、準決勝、決勝とおこなわれますが、残った四チーム、栄光・六中・片瀬の、実力の差はほとんどないということであつた。

栄光は、片瀬とあたつたが、栄光得意の速攻で、先取点をあげると、いきおいづいて、三対〇で、片瀬を、ふりきつたのである。

一中対六中は、一中の、キックアンドラッシュに対して、六中はきれいな、パスワークで対抗したが、グラウンドのあれで、上手に、パスがとうらなくて、延長のすえ二対一で、まけたそうであるが、グラウンドが、よかつたら、六中が勝つただろうということであつた。

さて、いよいよ決勝である。一中には、多くの先輩が、苦杯をなめているので、絶対勝たなくてはならない。守備についても、足が、がたがたして、かなり上つていたが、ホオイスルが、なると同時に、おちつきもでてきた。

立ち上り、速攻で、得点機を、二度つくつたが、オフサイドや、最後のつめが悪く、無得点に終わつてしまった。そのすぐあと、一中の例の戦法で、先取点を、とら

れてしまった。この一点で、ぼくはかなり、動揺したが、前以上のファイトで、その後の一中の攻けきを、防いだが、バックスの、ちよつとしたスキをねらつた。一中のするどいダッシュで、追加点を許してしまった。前半は、〇対二で終了した。みんな、しよげていたが、林さんのげきれいで、二点ぐらいなんだといういきおいで、後半にいどんだ。しかし、立ち上りに、すぐ一点追加されてしまった。ぼくは思つた。「もうこれであの台の上に、おかれている、優勝杯は、またも一中にもつていかれるのではないか」と、

三対〇とはなつたが、我等は最後まで、元気に戦つた。三対〇になつたすぐあとに、おちさんの単独ドリブルで、一点をかえし、

よけいに元気づき、すぐあと、又一点をかえして、三対二としたが時、すでにおそかった。敗けてしまったのである。本当に残念であつたが、ぼくには、もう一年チャンスがあるだと思つて、自分をなぐさめた。

この大会で、一中のダッシュユのよき、六中のパスのよさが、ぼくの勉強になつた。

それから、中学生で、試合に見にきてくれた人が、すくなかつたのは残念であつた。見ることもやることと、同じに大事であることを、わかつてもらいたい。

今年こそは、もつともつと練習して、一中をやぶり、夏季、冬季と練習することを誓つて、終わりたい。

終わり

◇ 作文 ◇

僕はサッカー部に入部した

十四期 石井 元

僕は小学校の時から、ラクビーとかサッカーの様な、男らしいスポーツが好きだつた。だから栄光に入つた時、最初からサッカー部に入部しようと思つていた。しかし母はあまり賛成しなかつた。「あぶないあぶない」の一本やりである。それに反し、父は「男なんだから男らしいスポーツをやれ」と云う。

ある日の学校の帰りに、上級生がかんかんとい日の照りつけるグラウンドの中で、汗まみれになつて勇ましく練習しているのを見ていいなあと思ひ、又スポーツ大会の時自分もやつてみて、やつぱり僕にありスポーツはサッカーだけであ

ると心に決めた。一日中どちかというと、勉強やこそこそと運動不足がちな僕の生活であつてみれば、一週に一度でも力一杯体をぶつつけて動きまわる時の快よさや、そのあとの何とも云えない清々しさは、魅力そのものである。

土曜日の授業も終り、僕達の楽しいサッカーの練習が始まる。先ず僕達は、上級生の指導でランニングをする。一周、二周、三周、それまでは未だいいとして、四周りあたりからになると、気が遠くなりそうである。しかし、これがサッカーの基本であり、体力を作る一番の方法であると思ひながら頑張る。それからダッシュ、ターン、キック、ヘッド、ゲームとなる。これらは部の上級生が、すべて足をとつて教えてくれるのである

。コーチのいない僕達の部は、上級生だけを頼りにまともつているので、僕達の上級生に対する信頼は大きいものであると思う。一日の猛練習も終ると、皆ふらふらしながら部室へ戻る。しかし服を着かえ、明かるく電灯のついた船を見ながら帰る道は、何とも云えないよい気持である。

◇作文◇

僕のいちばん苦しかった練習

中一A 加賀健一

僕が経験した範囲では、とても苦しかった練習は二回ある。いずれも二学期になつてからだ。その二回目の時の事を書こう。

二回目の時は、新井さん、田島さん、阿部さん達が指導して下さ

つた時のことだ。

その日はたしか少しはだ寒い天氣の時だつたと思う。練習はどんな進み、円(仮名)まわりが始まる頃になつた。「あつたかくしてやろう。」という声がかかり、円まわりがはじまつた。前から降つていた雨が一段と強くなつたが、僕等の身体は段々あつたまつて来た。態度の悪い所をあからさまにみせていたし僕は僕で靴の底のどろを落とすのに懸命だつた。雨がよいよ強くなると、練習はおじやんである。ランニングにはいる。新井さんの声「うんとまわろう。」いつも新井さんの時は、沢山かけないので、冗談だろうと思つてかけた。が、意外なことにはまわるは、まわるは。一周目は無事に過ぎ二周目三周目と段々横腹がいた

くなつて来る。けれども八周目位になると息が苦しいだけで感じなくなる。「いいかげんでやめてくれないかなあ。」と思つたが口には出さない。良心がとがめたのだ。「みんながんばっているんだ!!」こゝでへばつてはだめだ!!」と考へまたがんばる。「あと二周だガンバレ!」と新井さんの声、やつと救われたと思つてまた一頑張り、ふらふらになりながらもやつとおわり整理体操にうつる。呼級が乱れ、足もととはふらつきよく出来な。い。けれどもやつとそれらもおえてすぐにK.I.Oの教室へ。他の学年はまだやつていた。このことによつて、サッカーには、ガンバル、ということがどんなに大切か、又、サッカーからこのようなことを学びとらねばならない。という

ようなことを身にしみて直感した。それには「フアイト」がいる。ブランドさんのおつしやつた「フアイト」をもつてこの難関をとつばしよう。その後にはきつと「栄光」が待っている。栄光学園のためにも頑張ろうではないか。

◇ 作文 ◇ 練習

十四期 岡崎 一郎

部に入つて初めての日、高一〇の教室で、色々と話があつた。それが終わつたのは、二時半だつた。もう帰つてよいのかと思つたら、これから練習と聞いて、内心「ドキッ」とした。これから家へ帰れば、遊べるのにと思つたからである。しかし、「嫌や」というわけにもいかず、服を着かえてグ

ラウンドに出た。後はいつものようにやつたと思う。

初めの頃は、ぼくも皆もよく練習に出た。しかし、少しきつくなり出すと、（とくに冬休み中の練習）だんだんさぼる奴が出てくる。二、三人ぐらいだが、腹がたつ。自分から進んで入つた部なのにさぼるとは、少しぐらい辛くて、いやだなと思つても、出るのが当り前だと僕は思う。

サッカー部

中一 沖野 輝 昭

ぼくは、栄光に入つてからすぐにサッカーが好きになつた。それというのは、時々、学校の帰りにサッカーグラウンドの前を通りながら、上級生がサッカーをやつてい

るところを見ると、とてももしろそうなのでよく友達と一諸にグラウンドの中へ入つていつて見物した。そして、たまに自分たちの方にボールがとんでくると、それを友達同志でうばい合い、自分がうばうと、友達にとられないうちにつけりかえした。ぼくたちにとつては、それがまたたまらなくおもしろくてしかたがなかつた。だからぼくはだんぜんサッカー部に入る決意を固め、中一の二学期に入部願を出して、入れてもらつた。

サッカー部に入つてからは、毎週土曜日が練習日なので、ぼくは毎日毎日土曜日のくるのをたのしみにしていた。

練習中は上級生の指導者がいて、みな熱心に教わり、つらいことでもがまんしてやるので、とても

どがかわく、そこをがまんするの
も、体をきたえるうちの一つの
で、ある一定の時間がたたないと、
水をのませてくれない。だが練習
の中でも一番たのしいのは二グル
ープに分かれてゲームをする時で
ある。その時はちようど水をのん
だ後なので、元氣も出て、その時
こそは大いにフアイトを出し、グ
ランド中をせまいくらいにかけず
りまわり、ボールの取り合いをす
る。練習が終わるとグツタリとつ
がれ、すぐに部屋に帰り、昼間か
つておいたパンをむさぼり食べる
。その時のパンは何ともいえない
位のおいしさである。うつかりパ
ンを買うのをわすれたときなどは
友達から少し分けてもらう。それ
でも腹をペコペコにして家へ帰り
、急いで食事にありつくが、学校

からの帰り道、ことに電車の中で
はまつたくつらく、頭の中は食べ
物のことではないだ。

しかし、ぼくは小学校の時から
山岳部に入ることにしていたし、
山へのあこがれも強いので、残念
ながら二年生からは山岳部に入る
のでサッカー部はやめなければな
らない。しかし、ひまさえあれば
少しでもみんなと一諸にサッカー
をやりたいと思う。

◇ 作文 ◇

栄光サッカー

部員となつて

十四期 佐 治 大祐

初めてダツシュの原稿を書けと
言われ、何を書いたらよいかさつ
ぱりわかりませんのでお粗末です
が。。。。。

僕は四月から（一九六〇年）中
村君と「二学期になつたらサッカ
ー部に入ろう」と決めてあつたの
で、

他の部の宣伝に脱線せずにはや
んと、このとうりサッカー部の一
員となりました。新入部員紹介の
時は、ずい分スゴイ人達がいるの
だなとビックリしました。

初練習、さんざん走らされてか
ら、ダツシュ、タイン、サイドキ
ック、ヘッド、と五時頃まで、そ
の間一回だけ休息あとはすわるこ
とも禁止とあつて帰り道はハラペ
コ。畳屋さんを「サッカーしたら
やせるぜ」などといつてからかい
ながら湘南田浦へ。。。。家へ帰つ
たのは確か六時半頃。。。。お腹は
すいたというのを通り越してきも
ちがわるくなり、ペコペコだつた

はずなのに少ししか食べられませんでした。

しかし二学期の最後はそんなにつかれたりしなくなりました。が、冬休みに入ってから練習の二日目、市村さん、吉川さん、宮坂さんが先生の時、最後のランニングが十周、それも雨の中であつてそうとうくるしかつた。

以上のような事が今までにあつたことですが今後は

卒業するまでズーッと、サッカー部の部員でありたいと思います

終わり

◇ 作文 ◇

サッカー部へ 入つた動機

十四期 矢内祐輔

僕がサッカー部へ入ろうと思つたのは、今から考えるとそれは遠

い昔のある一瞬のことでありました。ええー僕は実力により栄光の試験に受かり次に考えたのは、部活動のことだつた。最初のうちは、あの部にしよう。いやこの部の方がよい、などと迷いに迷つたが学校の帰りがけにふと見た中学生高校生の練習ぶりや、試合の男らしさ、面白味が迷つていた僕の気持ちを持ちをサッカー部へ、サッカー部へとみちびいて行き、ある時は、ゲームに見とれ下校のベルがなつたのも忘れ、帰りがけの上級生や先生に早く帰るよう注意された。こんなにサッカーというものに興味を持つた僕だけど、いざ友達ちに「どの部へ入る」と、聞かれるとはつきりした答えができなかつた。ただどはつきりした答えができるようになる時がきた。それは

対湘南戦 たがいにはフアイトぶつけあつて戦い、試合が終了した時応援のひとたちの拍手にたたえられ土まみれになつてうれしそうに顔をほころばせている選手姿をみた時、僕もこういうふうになつてやろうと思ひました。これぞ僕がサッカー部に入ろうと心に強く、強く、強く決めた世紀の一瞬（1¹⁰⁰秒）であつた。その上サッカー部の人たちはいつもにこにこしていて親しみやすい人たちばかり（お世辞ではありません、ヘッヘッヘ）

なので他の部へ名残りをおしませんがサッカー部へ入ることができました。

話しは変わつて僕は「オギヤア」と、生まれた時から「作文」と「歌」は苦手でこんな文しかかけま

◇作文◇

入 部

十四期 新倉 正和

ぼくが、この部へ入部した事を友達に話した時、友達は、こんな事をいつた。「君が？ ほんと？ 君みたいにおとなしい子が、サッカー部に入るなんて思わなかったよー」と、ばかにしたようにいつた。また組の先生も大変おどろいていらつしやつた。それは、ぼくが小学校時代から声が小さく、はずかしがりやであつたためで、おこる事もできない事である。いかにもぼくは、体と反比例しておとなしく見える。でもぼくだつていつまでもおとなしいわけでは、ないはずだ。そして今度は体に正比

例して、おとなしくないうになつて見せるつもりだ。こういう気構えで入部して、いよいよ練習開始だ。サイドキックは、五メートルから十メートルしか飛ばなかつたが、想像以上に飛んだのですぐにおもしろくなつた。しかしヘッディングは、やつぱりこわくて、何回も指導してくれる先輩からのせつかくの球も手でうけ取つてしまつた事がある。三週間目ぐらいになると、キックも前よりは、強くなつたし、ヘッディングも入部当時みたいにしたさが後までも残らないで、やつた後、いたさが、どんなものかというのをわすれるくらいになつた。インステップは、一回つまさきだけで持ちあげるといたくなり、二回、三回目が、こわくなり、もう一度つまさき

でやると余計いたさが加わつてあげるのもいたくなる。しかし練習がおわり、てい泊している船のあたりが見えるころになると、「ああ、サッカーの練習を少しでもやりおえたんだ。」と思うと急にうれしくなる。才一学期もおわつた。入部当時よりは、おとなしくなくなつたと思う。ぼくは、同学年の友達よりへたな方だが、だんだん、サッカーにおもしろ味がかんじられてきた。

おわり



入 部

◇ 作文 ◇

十四期 小 菅 恭 彦

ぼくがサッカー部にはいることにしたのは栄光生になつてすぐだった。兄が山岳部なので山岳部も考えてみたが、兄弟で同じ部にはいるのもつまらないから他の部に入ることにした。兄はサッカー部がよいだろうと言い、父も全く賛成であつた。

学校の帰りにサッカー部の練習をながめていたのも、ぼくがサッカー部に入る気持を強めた。そして、いつもヨット工場の前をまがつてサッカーグラウンドの前を通つて帰るようになってしまつた。

また同じ組の吉川君はお兄さんがサッカー部なのでサッカー部の事を良く知つていて部員の人の名

前などを教えてくれた。そんなわけで一学期中にサッカー部の上級生の顔と名前は大部分覚えてしまつた。

サッカー部に入つて最初に感じたことは部内のふんいさが非常に明かるいということがつた。土曜日に高校行舎へ行くといつも部室からガヤガヤ、ワハハハと騒音が聞えて来る。そして上級生の笑い顔はよく見るが、怒つた顔はいままで見たことがない。

ぼくは土曜日の放課後には、早く球がけりたいため、いつもの十倍（少々大げさ）も速く弁当を食べる。そうして急いで練習場にかける。

そして今、ぼくはサッカー部が学校中で一番良い部であると思つている。

「終」

サ ッ カ ー

◇ 作文 ◇

十四期 中 村 茂

ぼくが、サッカー部に入りたくなつたのは、そう、六年のころだった。それは、ぼくのおじが二人（一人は大学生でもう一人は中学生）サッカーをしていたからである。又、他のおじで今船員になつている人は、大学時代ラグビーをしていた。このようなことから、ぼくは、そのころサッカーの話を聞いていた。

栄光に入つてからはますますサッカー部に入りたくてしかたがなく、試合を見ていて我まんをしていた。かれこれしているうちに二学期がきて、ぼくはさつそく申しこんだ。

前からかくごはしていたものの

、やはり入つてみると相当きつい練習である。しかし、高校生などの指導により、この一学期間で少しづつうまくなつてきた。この指導を受けて、栄光フアイトを身につけ、一人もだつ落さないように行こうと思う。

FIGHT, FIGHT

◇作文◇

僕はこうして

サッカー部にはいつた

十四期 吉川 実

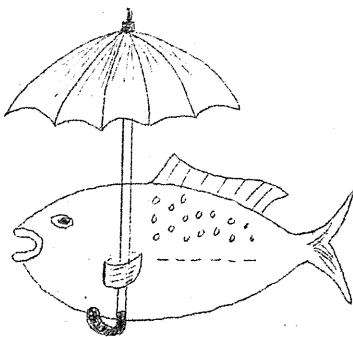
僕が、中学に入つたらサッカー部へ入ろう、と初めて考えたのは小学校四年になつてからだつた。それは、丁度兄貴が栄光の中一になつて、その二学期にサッカー部に仮入部したからである。そしてその話を聞くと、仲々面白そうに

思つた。その時から僕は早く中学になつて、サッカー部に入りたいと思うようになった。

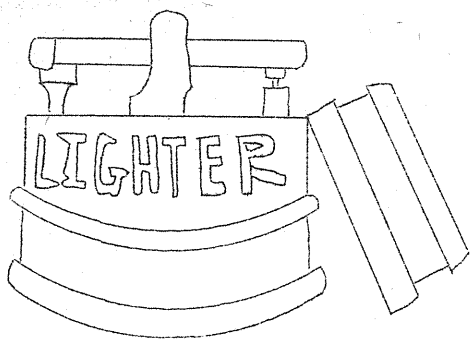
中一になつてから、僕はサッカーの試合を四、五回見にいつた。それで、サッカーはなんて面白いのだろうと思ひ、早く仮入部ができる二学期にならないかと思つてゐた。やがて長い一学期もおわりになり、やつと二学期になつた。二学期がはじまつてすぐ、入部願用のイエローペーパーをもらつた。その日すぐに家へかえつて、まづ先にその紙を出して、「サッカー部」とかいてもらつた。そして、翌日になつてすぐそれを出した。その週の土曜日、初めての練習があつた。その前日、はやくからサッカーの仕度をして、勉強など殆ど出来はかつた。今も練習の前日

は勉強はあまりできない。それは、僕だけではないと思う。みんなも勉強がそうできないだろう。そのわけは、みんな早くサッカーがやりたくてしょうがないからだと思ふ。

何にしろ、僕はサッカーが大変すきだ。だからサッカー部にはいつて本当によかつたと思う。これから、がんばつていきたい。



了了



口キ刀
人
火聖
空

中二S君、同じく中二のM君に
ナツプサツク（KNAP。SAC
K）を指さして尋ねました。「あ
れ、何ていうんだい？」M「ナツ
プサツチだよ」S君、意気揚々
とあるお店へ出かけて行つて云い
ました。「ナツプサツチ下さい」
お店の人はキヨトンとしていたそ
うです。後日S君曰く「だつてサ
他の奴ならともかく、Mがそう教
えてくれたんだもん」M君、ど
うぞS君の涙ぐましい信頼を裏ぎ
らないでやつて下さい。



W
A
P
サツチ

ある日のこと、中一の□君、熱
語テキストを眺めながらこうつぶ
やきました。「これは何だ？ヤブ
レガオヒトワライつて。。。」ソレ
は、「破顔一笑」でありました。
又ある時、彼は栄光手帖をひろ
げていいました。「病氣やカイワ
レの時は医務室へか。ネエ、カイ
ワレつて何サ？」但しこれは、
中一になつたばかりの日の出来事
であつた事を、本人の名誉の為に
一言申し添えておきます。

破
顔
一
笑

ヤ
ブ
レ
ガ
オ
ヒ
ト
ワ
ライ

新人大会より

ある日学校の帰り道、K一のM

君、K君が何か話し乍ら歩いてお

りました。一諸に歩いていた中一

S君、フト「コウカ」という言葉

を耳にして、「ネエ、コウカつて

何?」「後架だよ」「何の意味?

」両君笑つて答えてくれません。

S君自分で一生懸命考えはじめま

した。しばらく考えた後、S君は

得意そうに呼びました。「ワカツ

タノ後架つていうのは、背中に十

字架を背負つて歩く事でしようノ

」両君???、やゝあつて一斉に

笑い出しました。S君、何故笑わ

れるのか、しきりにわけを尋ねま

したが、誰も教えてくれませんで

した。夕日の光る道を、三人がト

コトコ歩いて行きます。

その一

新八大会準決勝の日の事、K一

K君熱を出して試合に出られなく

なりました。その代役を務めたの

は、何と蓄膿症の疑いで学校を休

んで医者通いをしていた守チャン

。もとより彼は道具等持つていな

かつたので、小さいのを我慢して

K君のを着てやりました。すると

見る人見る人口を揃えて云つたも

のです。「オツノ守チャン今日は

どうしたの?オツソロしくキレイ

じやねエカ」「守チャン、一段と

男前が上つたぞ」「一体何事が起

つたの?」「いやはや大変な騒ぎ。

〇一K君など、誰だか見当もつか

なかつたという事。

因みに、そのキレイというユニ

フォーム、ところどころシミもつ
いてうす茶色になつていたし、そ
れ自体は、どうみてもキレイとは
云い難かつたのですが。。。。

その二

大会決勝戦の日、K一のT君、

スパイクを忘れて来て了いました。

持つて来てくれる筈の〇一Y君、

いくら待つても姿を見せません。

心配のあまり、半ばヤケツパチで、

「オレ長靴でやつちまおうかな」

とか、アベベ選手にあやかると

でもないだろうが、「ハダシでや

るサ、ハダシにきめた。」等と云

つていたが、どうにか運動靴が借

りられ、練習をはじめました。

試合のはじまる直前、塚田先生

がスパイクを持つて息を切らせて

かけつけて下さいました。なのに

アア何とツイテネエ、その靴は五
一、君のではありません。塚田先生
、わざわざ小ツチャくつてはけな
い靴をはるばる運んで下さつた
いうわけ。

その三

我が栄光サッカーチームは、4
I Oで勝利を修め、いよいよカッ
プを貰う事になりました。E一
のT君が、さゝげ持つて帰つて来た
カップは、金色サン然と輝いて：
いなくつて：。皆口を揃えて、キ
タネエカップだなア、

ロツカーへ戻ると、Y校の選手
が拝ませてくれと云いました。そ
して彼も又曰く「キツタネエナ
I。」文句を云うのではありません
ん。カップもクタビレて来たので
すよ。

クタバシ

期月

たじまたくや

何号目のダツシユであつたか、
ハッキリと記憶として残つていな
いが、松田京司兄が、彼等十期生
の紹介をやつた事がある。
ところで今度は、新しく部をに
なつて立つ十一期蹴球部員の紹介
をさしていただく。まず個々の事
を延べる前に全般を通して見る事
にしよう。

十一期：：：：十期の次で、
十二期の前である事だけは、俺に
も明白に解つてゐる事実であるら
しい。いやいやまだあるどうも奴
等の中には、余り強烈なのがいな
い様だ。皆模範的な栄光生である
、欠点といえば勉強が出来なくて
下品であるというほんの微少な事
。まあなんと申しましようか立派
なもんですネ、いやまだまだ、
ありますよ、奴等が金を持つてい

るといつたら一東平が、財布に入
りきれない百円札で鼻をかんだと
か、四朗は四朗で金の重さで肩が
こつたとか、いやはや気が大き
くなる様な話ですよ、全く。

皆さんにそつといい事を教えて
あげましょう。奴等は人がいいか
らおごつてもらいなさい。けれど
彼等をねらうのは、もらいたてに
限るよ、なにしろ月末はいつも、
ピーピーだからね。

そろそろ人物素描に移る事にし
ましょう。ナイショの話だけど、
我輩は彼等にモデル料払つてねえ
んだ。これ誰にも言つちやだめだ
よ。

「オ一話」

「きのうの海津見たかよ。」
「見た見たすごかつたな。」
「左ジャブをこおやつて打つて

てよお。右フックでボーイン。」
「俺スツとしちやつた。」

皆さん、この二人誰だと思ひ
ますか？彼等は部きつてのボク
シング通だと自惚ている鈴木莊一
君と「デレ」こと高橋謙之祐の両
氏である。ことわつておきますが
吉川威君もボクシングのファンで
すが、今はダツシユの編集に余念
がなく、ボクシング等の無駄話に
興じてる暇がないのでここにいま
せん。彼は後で記す事にしまし
う。

この二人、生れのせいか育ちの
せいかは知らぬが強烈に野蠻であ
る。何しろ顔を会わずとすぐ話が
レスリングかボクシングになる。
話だけなら可愛げがあるが行動に
移ると始末が悪い。たとえば、ヘ
ッドロックをやつたり、サウスボ

ースタイルとか言つて身がまえた
りする。なんともはや危険な奴等
だ。皆さんも、こういう野獸に近
いような人には十分気をつけて下
さい、身の為です。

「オ二話」

「アツ、イケネー俺弁当忘れた」
「とろい／＼」

「バカッ!!」最初の「アツ、イケ
ネー。」と最後の「バカッ」と一
うのが癖なのは研である。

研といつてもこれは高校のみに
通じる呼び名で、本名は、親から
もらつた研一という名前と、祖父
さんのその又祖父さんが付けた、
宮坂という苗字とがある。

彼は一見アフリカ産のモナリザ
の様な微笑で人を魅了するか、本
当は大変おつかない。なにしろ「
バカッ」て言葉をやたらに使うか

らネ。だけどモナリザもヘッドの時の顔はひどいもんだネ、なにしろかにと亀との二世の頭を棒でなぐった様な顔だ。想像して見たまえ、なんと面白い顔だろう。ウフフ

「才三話」

ダッシュも一段落着いたらしい、吉川がやつて来た。隠れて彼の動静を観察することにしよう。

「えゝとね、三十年の統計でね、ケニヤの人口が五二三一八そしたら今度の調査は一〇二〇九人なんだ、大分ふえたな。」

この知識は、彼にとつては氷山の一角位でしかない。なにしろ彼の頭の中には、ありとあらゆる知識が入っている WALKING

dictionary (生辞引)だ。何しろ下は、ボクシングのランキングから上は大学の所在地まで、あり

とあらゆる雑知識の宝庫である。さしずめ雑学博士とでも言うか。

「才四話」

「オイ小島ズボンに泥がついてるぞ。」

「オレは下の方は気にしないよなにしろ上の方にグツ、自信があるからな。」四朗にして出てくる言葉である。彼は部きつての好男子と自称している。なんせドロンとデインと裕次郎とをコンクリートミキサーに入れてセメントを一諸にかき回した位だから。。。又洋服の着こなしも見事なもの、ライフ誌のベスト・ドレッサーに選ばれた程。昔から「色男金と力はなかりけり。」という言葉が世間一般の通う相場となつてるが彼にはこれはあてはまらないらしい。(半分おせじで半分うそ。)

「才五話」

「もしもしとん平、イヤ東平君、いらつしやいますか。」葉山の家へ電話を掛けた時の最初の失畑談である。そのとん平くん事東平の名前の由来から紹介。東平とは大そう大きな名である、何しろ東洋平和だそうである。現在世界平和がさげばれているが、それには東洋平和が先きだからね。ところで彼は軟かい体でボールを蹴っている。

「ガチツ」 変な音だ。

「おいどおした／＼」

「地球蹴つた!!」

彼は今いきづまりを感じてるそうです。

「才六話」

走る度に関節がギンギン音を立てている様なのが北村富治君。彼の体のかたさは守ちやんと、

一、二を争う。なにしろ彼とぶつかつたら、コンクリートのへいと正面衝突した様な錯角におちいる。又、ケツチングのすごさも強烈そのもの、骨盤がこつちのモモのあたりへ、「グイッ」とくい込む。『イテエー』二、三日はあざをさわると痛さが頭にくる。

「オ七話」

「彼のクリヤーのうまさは部きつてである。」と言つても彼とは誰のことだか解らないであろうが、何おかくそう彼こそ押しも押されぬ名？ センターフォワード成宮君である。『アレエー、フォードがクリヤーなんかするの？』とお願いの方に参考としてスコアブックの一部を紹介しよう。

「対一中 三時 於栄光。
。。。FWの健闘で追し続ける
がゴール前決定力のない悲しさ。」

最後のチャンス成宮がゴール前鮮やかなクリヤリングで追加点ならず、ホイッスルとなる。『

しかしながら彼のキープ力には見るべきものがある。何しろ中三の時入部してすぐのゲームで左サイドから右サイドまで真横にカニばい式にグラウンドを横断したという経歴の持主である。

「オ八話」

緑のしまのスパイクをはいて、ストッキングを下ろしてすかしてゐるのは田島らしい。スパイクのわりにキックが悪い、フォワードのくせにボカボカあげる。

ヘツディングをやる、やらなきやいいのに、目鏡を落して必しにさがしている。むなしい努力。

涙ぐましいですネ。

彼等が帰つていきます。

空腹と疲れと冬の木枯しにいいめられてゐるのに、彼等の顔は輝いています。何故でしょう、何故なら彼等は新しい未来に大きな希望を持つてゐるからです。

彼等は彼等なりに、部の発展に力を尽しています。どんな小さな力でも集まれば大きくなります。皆さんも彼等の新しい出発と大いなる発展とを祝して下さい、又、彼等の頭上に勝利の女神の微笑まん事を!!

(完) たくや記



ヤア先輩

わが生い立 の記

六期 石 原 薫

僕が栄光サッカー部に入つたのは、中学二年の六月頃だつたと思う。それまでサッカー部の練習を見て、すごく威勢が良いのでやつてみたいと思つていた。丁度 原さんをはじめ、三期、四期のごつい八達がグラウンド狭しと走り廻つていた頃だつた。

ランニングシヤツに半ズボン、運動靴というスタイルでグラウンドに出た。早速三田さん（四期）が足を取る様にコーチしてくれた

。サイドキックとトラップینگでは、「オメエ、ナカナカ素質アルジャネエカ、オッホホホ」と云われたが、インステップキックでは「マア、ソノウチニ蹴レルヨウニナツカラヨ」だつた。

その頃のグラウンドは、野球場の方へ広がつていた。ある日、あのクローバーの上でラウンドキックをやつていたら、いゝボールが転つて来た。力一杯蹴つたら、足にいつものシヨックが無い。空振

りかと思つたら、向う迄ボールが飛んでいたのである。インステップはこんなに痛くも何ともないのかと悟つたのだが、その日から再びアンテイ。シヨックで蹴れた時まで数ヶ月を費やした。キーパーの練習もさせられた。しかし、セービングがどうしても出来ない。折角矢島さん、伊藤さんというその道の権威と一諸だつたのに、今考えると残念だが、原さん、三田さん、永島さん、石井さん、稲葉さん、佐野さん、川喜田さん等が、生れて初めてゴールに立つ僕に向つてボカボカ蹴つてくるのだからたまつたもんじやない。そのうちにキーパーには向かないという事になつて、サイドハーフとなつたのは中三の頃だと思う。栗原が中三から入部して、僕とライ

トハーフの位置を争うことになつた。試合も前半は僕、後半は彼が出た。前半で退場するのは惜しかったが、良い勉強になつた事は確かである。後半の試合を見ていると、前半自分がプレーをしている間は気が付かない様な事に沢山気が付くからである。

これ迄が中学生生活であるが、あれから六年程経つから「今だから話そう」といつた話を思い出してみようと思う。全く中学生の頃はよくさぼつた。結果は全部損になつただけだが、この頃はそんな事は考えもせずにさぼつて了つた。それが又、間拔けなやり方で、仲間の一人在今日はどうしても帰らなければならぬなんて云う時は、大抵映画でも観ようという腹だつた。そこで後になつて一人だけ

で先輩に叱られるのでは大変だからみんなでさぼろう、そうすれば一人あたりの被害はあまり大きくない、なんて考えてぞろぞろとさぼつたのである。決して六期生全部ではない。ブラツクリストに載つていたのは七、八人だろう。一度は頭腦的プレーで見事に成功した。ある土曜日、僕が部室で練習の仕度を終つた時、同級の一人（サッカー部員ではない）が部室へ来て、「事務室へ君の家から電話で、今日は帰つて来いってさ」とかなんとか云うので、残念だなあと思ひながらも家に帰つた。そいつの演技には感心したが、未だに良心がとがめてならない。何といつてもさぼる暇があつたら、ボールを蹴つているに限る。練習中でもそうだ。サッカーはチームプレーであるが、その土台は個人技である。一人でだつて練習は出来る。ヘッディング、ヴォレーキック、ドリブル等は練習日に限らずこなししておけば、どれだけ進歩するか知れない。試合をやると、このトラップはもう少し練習しておけばよかつた、等と悔む瞬間が無数にある。兎にかく練習をさぼるという事は損である。本人のプレー

の上達の為だけではない。どんなに下手な奴でも、ボールを拾うくらいは出来るのである。その事はチームの為に大きなプラスになるからである。こゝに僕の恥さらしをするのも、ひとえに練習、試合の面白さを理解して貰いたいからである。

さて高校生ともなるとサッカー部に対する考え方はだいぶ固まつ

て来た。先輩や、東郷先生の指導でどうやら他の連中と同じようなプレーが出来る様になり、それまでよりもサッカーを楽しむ様になった。勿論苦しみも多かったが。高一の時は、四、五、六期生でチームを組み、リーグ戦にのぞんだが、他校の高校生はどうも恐かった。高一の時もチャーシュー（川喜田さん。五期）に迷惑をかけた。雨の日の練習で、上から下迄ドロだらけのグシヨヌレとなり、洗うのは面倒だということで、僕と誰かと海に飛び込んで、すっかり良い気持ちになつて部屋に行つたら天狗に捕まつて、散々しぼられた。

（その割に乾かなかつたが。）チャーシューもキャプテンとして、監督として不行届きで申しわけないと天狗に謝まつてくれてやつと

助かつたのだが、それ以来、チャーシューと永島さんの顔を見ると寒気がする。僕等が何かしでかすと、教室に集めて説教をブツのが永島さんとチャーシューで、昔は笑顔なんか滅多に見られなかつたのである。

高二からはこの様な前科を棚に上げて、サッカー一途に高校生活を送つた。そして先輩諸氏、後輩

諸君そしてプレイヤーの諸君の努力が実つて、東日本大会、全国大会と出場する事が出来たのである。僕個人になつては全くの幸運である。しかし、折角の晴れの舞台で、満足なプレーが出来なかつたのは、何とも済まないし、残念だつた。又全国大会について云える事の一つに、コンデিশョンの調整の失敗がある。なにしろ遠征に

関しては未経験者ばかりだつたから仕方がないことだが、去年の関東大会の水戸遠征では、僕はその時の経験と大学でのやり方を取り入れて気をつけた。それでも眠れなかつた者も居た。本当に当人は残念だつたと思う。コンデিশョンの調整はこの様に大切なものだから、これからも遠征等の際は気を付けてほしい。

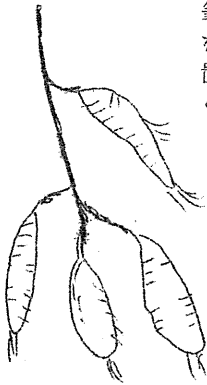
高三になつて、本来なら部生活から退くべき成績であつたにもかかわらず、強引に居残つてボールを蹴つた。僕の父は話が解るから許してくれたが、校長はだいぶ渋い顔だつたらしい。高三になつてプレーを続ける者が注意しなければならぬ事がある。それは、技術が高二までのプレーと比べて、練習時間の関係で少し劣るといふ

事である。前にもまして動かなければならない。ところが疲れると勝手に休んだり遊んだりしてしま

いやすい。キャプテンは下級生としてあまり強い事も云えない。結局高三が自覚して練習をしなければならぬのである。高三ともなると自信、余裕といったものがつき、飛躍的に上達すると思う。スポーツは高校二年迄などという考

えはすてゝ、どんどん暴れてほしいが、以上の事だけは注意してほしい。また高校までゝやめてしま

うという事は、宝の持ち腐れではないかと思う。五、六年でサッカーをやつていたとは言えないし、学生々活は高校を出ればあと四年しか無い。せめて四年の間でもサッカー（又は他のスポーツ）を続けて欲しいと、僕は心から希望す



卒業するにあたって

九期 大前 芳 蔵

遂に栄光から去る時が来た。昭和三十年四月に、希望に胸をふくらませながら講堂に入り、校長先生の訓辞を聞いてから、早や六年である。その頃は、今と全然趣を異にしていた。今のソフトグラウンドは、草がぼうぼう生えていた。湿地帯であつたし、今のバレーコート

が何十回？となくあつた。そして
中一の二学期の仮部員募集の時も
、僕も皆に負けず、どこかの部に
入つてやろうと思つて、小学校の
時の経験から新聞部に入つた。し
かしつまらない事、つまらない事
、甚だしい。中一では何もやる事
がないから、いつも部室の中を右
往左往しているだけである。退屈
だから、窓についている紐にぶら
下つていたら、あやうくあの世に
逝きかけた事もあつた。中二にな
つて、正式に部員募集があつた時
に、体が小さいから、体をきたえ
ようという気持で、運動部に入る
ことにした。しかしどの部に入つ
ていゝか解らない。えゝ、運動神
経にはかなりの自信？を持つてい
たので、色々迷つた挙句、一番不
思議そうなスポーツ、又同じ駅か

ら乗る上級生がサッカー部に属し
ているから等の理由で、サッカー
部に入つたのである。しかし、入
つてみて驚いた事、驚いた事、自
分の想像していた様な、なま易し
い物ではなかつた。一りを蹴つて
も、絶対地面を離れないし、ヘッ
ディングなどは、まさに恐怖のま
と、ボールがじわりじわりと飛ん
でくる鉄砲玉の様に見えた。特に
、篤さんのヘッディングの練習は
天下一品で、自然と目から、熱い
ものがたれてきてしまう程であつ
た。今から思うと、あの時よく部
を去らなかつたと思う。同級生に
云わせれば、あんな奴がよくサッ
カー部に、という具合である。し
かし、生来の負けず嫌い、それ
とも、サッカー部に僕の心をひく
何物かがあつたのか、結局部を止

めなかつた。しかし、技術の方は
、全然だめであつた。特にヘッデ
ィングは、前にかろうじて飛ぶの
が、十本に一本であつた。とにか
くこんな様であるから、試合に出
られる筈はない。そこで僕は、試
合で友達が精魂こめて、球に執着
する姿、味方がネットをゆらした
時、練習の後、ぼんやりと限りな
い空を見る事で満足した。特に練
習の後に見上げる空は、自分がそ
4 3
の中に溶かされそうで、限りなく
美しい物であると思つた。しかし
、曲りなりにもサッカーをやつた
せい、背の高さは、一年に十セ
ンチメートルも伸びる程であつた
。こんな調子で高校に入つたので
ある。しかし、高校に於ては、あ
るしつかりとした目的を持たねば
、サッカーをやつていけないと気

付いたのは、高一の時の夏休み、忘れもしないあの雨の日、Y校に完敗した後、篤さんの話を聞いた時である。この時から、自分がどうしてサッカーをやっているかという事が、薄々ながら、感じ取る事が出来た。こうなると、いくら下手でも練習は楽しい。又、部にいる人々ともなじんで、しばしば山に行ったり、先輩の家に行ったり、夏は友達の家へ行つて泳いだり、また試合もする事が出来た。でも、又僕の前には問題が生じたのである。大学入試。先生に呼ばれたり、部員以外の人と付き合っている、どうしても不安にならざるを得ない。そして、とうとう愚かしくも、自分の義務さえも怠る事をしたのである。でも、結局これも乗り切れた。春休みに山へ

行つたおかげである。高三になつて始めて、大学入試は高三になつて本当に考えるべきだとつくづく思つた。結局サッカーは僕にとつて離れ難いものになつてしまつていたのである。以上が僕のサッカー歴である。この間得た事は沢山ある。次に書く諸項である。

(一) 部に於ける自分の位置を自覚する事。

この事は特に技術のあまり上手くない人に云つておきたい。必ずその人の個性にあつた位置というものがある筈である。部室で皆を笑わす役、部室の掃除専門役、マネジャー等、どんな位置でも良い。とにかく、部で自分の召めている位置というものを理解

しなければ、特に技術の遅れている者にとつては、部生活がつまらなくなる事は必条である。

(二) 友を信頼し、共通の目的に

は、一致協力して前進する事。サッカー部には団結が必要である。共通の目的には、私情をかなぐり捨て、協力すべきである。団結の無い所には、勝利は決して無いのである。

(三) 出来るだけ友達と話し合う事。

この事は、現在の栄光生に甚だ欠けている面である。(最もホームルームという組織もあるにはあるが。)蹴球部

は、その事に於て恵まれてゐる。練習の後、学校の休み時間、放課後、山小屋等、話し合う場所は沢山ある。少しでもトラブル、悩み、があつたのなら、すぐにもデイスカッションを開くと良い。僕達九期生は、デイスカッションによつて問題を解決していつたが、結果は非常に良かった。又、山小屋へ行つたのなら蹴球部の事だけでなく、もつと広い問題を論じ合うのも良いであらう。

(四)、栄光が試合に勝つ事によつて決定される価値というものは、週二回の練習で、皆と苦しみ、助け合い、自分達だけでやつたという事に起因する

。目先の勝利の快感というものにとらわれてはならない。例え弱くても、自分達でやる事だ。そうでなければ、唯勝つ事だけを目的とする者になり下がつて了うであらう。ここで僕が云つてゐるのは、負けても良いという事ではない。又、助けをかりてはならないという事でもない。あく迄、部の主体は自分達であるという考えを捨てゝはならないという事なのである。

(五)、蹴球部は素晴らしい部であるという事は、疑いない。

誰でも、一度は部から心が離れる事はある。特に技術の上手くなかつた僕などは、中二、中三、高一、高二、で各

一度づつ、四回も経験してゐる。しかし、その都度、先輩諸兄の言葉、上級生の言葉を聞き、同級生のサッカーに専心する姿を見て氣を持ち直して、サッカー部から離れなかつた。もし、自分の心が、サッカーというものから離れたと思つたら、すぐ目上の人に相談するか、部誌ダッシュを見る事だ。サッカー部が如何に素晴らしい物かという事が、一

(六)、サッカーと勉強は両立出来る。

この事は、サッカーと勉強の両立の問題である。そして、特に最近になつて表面的になつて来た。接角蹴球部に入

つたのに、勉強が出来なくなるからといって部を去る人がかなり居る。その様な人は、スポーツをする事の楽しみを自ら捨てた、可哀そうな人である。フアイトさえあれば、普通の体の人であるならば、必ずサッカーと勉強の両立は出来る筈である。

以上六つの事が、僕の五年のサッカー生活に於て感じた事である。この様に回想して、自分の感慨を記してゆくと、もう一度中学二年生になつてみたいなどという気持が生まれて来る。しかし、もう二度と戻つては来ない。中学生諸君、二度と来ない、楽しい中学、高校生活を、あの緑の？グラウンドで、夏は汗にまみれ、冬は白い

息を吐きながら、力一杯サッカーに情熱を傾むけたのなら、後になつて悔いる事のない中学、高校時代であつた、と云い切れるだろう。そして自分の行くべき道も定まり、生涯の得難い友も得る事が出来るよう。とにかく、サッカー部に属している事は素晴らしい事なのだ。おつと、最後に二つ言い忘れた事を述べる。

(一)、栄光には山小屋がある。

あの小屋はいゝ小屋だ。色々丹沢を歩き廻る事が出来るし、特に冬、ストーブを囲んで語り合う事は、なかなかいゝものだ。蹴球部の人には、せめて一回はあの緑の谷に囲まれた、素晴らしい山小屋を訪れるべきでさる。皆の団結力は

更に固まる事は、云うまでもない事だ。

(二)、部だけでなく、学校の行事

等にも熱意を示す事。

栄光は更に前進しなければならぬ。その歯車を前進させる一つの動力としても蹴球部は存在しなければならぬ。勉強をやりながらもスポーツが出来る事を、蹴球部の強い団結心、力強さを、栄光生全体に示して貰いたいのだ。僕等がやつた、サッカー部展、栄光十三年の歩み、等も一つの方法だ。そして栄光を、単なる大学受験予備校と考える生徒を、少しでも少くして貰いたいのだ。現に高三の時やつた展示会の結果を見ても

、大学受験予備校と考えている人がかなりいるのです。この事に於いても、蹴球部の奮闘を大いに望みたい。

以上、何分にも忙しい最中に書いたので、まとまりの無い文章になつてしまつたが、これ等が少しでも蹴球部の皆さんのたしにでもなつたのなら、僕は倖せだ。

奇妙な話

九期 田畑 哲也

イタリア映画の話だそうで、僕はその題も俳優が誰だつたかも知りませんし、何で読んだのかも忘れてしまいました。でもこんな映画評を読んだ事がありました。

二人の男が海からあがつて来た

のだそうです。その二人は、大きなタンスを背負つておりました。そのために世間からつまはじきされてしまつたのだそうです。電車に乗る事も断わられ、娘達には嫌われ、子供達からは石を投げられたそうです。そこでその二人は、タンスを背負つたまゝ再び海へ帰つて行つてしまつたのだそうです。

どうもわけのわからないストーリーなのですが、当時はかなりの評判となつたのだそうです。このタンスを平和だという人もいましたし、いやヒューマニズムだという人も居りました。又ある人はこれを原爆だとも言いました。しかしこの映画評はこんな話を続けています。イタリアを訪れてこの偶

話の託する物を尋ねた時、この地方の人々はこともなげに言つたというのです。

「なにもこのタンスは平和とかヒューマニズムとかそんな大それた物ではありません。しかし人間はどうしても自分と切り離せない何かを持つてゐるに違いないのです。他人から批判され、嫌われ、嫌がられ、更に自分さえもが嫌悪をおぼえても、どうしても自分と切り離せない様な何かがある筈なのです。それがこのタンスなのではないでしょうか」と。

個性という物であるかもしれないが、このタンスは何か奇妙に僕の氣にかかつた物でした。そして僕のタンスはいつたい何だろうと考えた時、複雑な感慨にとらわれてしまいました。僕のタンスを

作つた海は、今日の時代であり、ティーンエイジャーという世代であり、栄光学園での学校生活であり、そしてサッカー部の生活であつたと思います。そして僕のダンスを作っている最も大きな要素が最後のこれである事も疑えない事実であると思います。

しかし僕のダンスがどんな形なのか、優れているのか劣っているのか、他人から受け入れられる物なのか、嫌われるものなのか、僕には解りません。そして僕にわかつている事は、そして誇り得る事は、確かに僕のダンスを背負つてゐるんだという事です。そして更に僕にはあの偶話の二人のように、帰るべき海を持つていないという事の様です。そして高校卒業、そして栄光のサッカー部卒業

という一つの転換期をむかえて僕がしなければならぬ事は、僕のダンスをもつとこくめいに、もつとはつきりと見極める事のように思えるのです。

我が友 サッカー部に

九期 林 吉 永

サッカーとは
この地上にて
吾等が糧とせる
果実なり

コオラン二巻

二十三章……妙訳

先ずは十一期よ頑張れ！

四四四四は十一だ。だから

「十一期よ頑張れ」だ。一人でこんな理屈をつけてニヤニヤしているリンキチだが、そのリンキチも人並に卒業することゝ相成つた。氣持よく、何二つと不愉快な思い出無く追払らわれるとは、実に感無量、仕合わせな事だと感謝感激の涙にくれてゐる。これもサッカー部にいたお蔭であると……多謝多謝。

栄光学園で何をしたか？ 勉強一少しと、サッカーはそれより沢山。後悔することゝ云えば、「もう少しサッカーをやつておけば良かったなあ」と思う事。お世辞抜きに、正直のところそうである。勉強をもうチョットすれば六十点とれたのに、と後悔する氣持と同じである。

リンキチは中学一年の時、書道

部に仮入部しながらサッカー部に
入つてボールと戯れていたという
規則違反者であつた。(今ならば
白状しても差し碍りあるまい。)
それこそ栄養失調みたいにガリガ
リにやせた部員だつたから、今の
素晴らしい男性美(自任党公認の
キャッチフレーズ)にその母親が
喜ぶのも無理はあるまい。兎に角
、ゴールに突つ立つていたら、シ
ュートする先輩から、「オイッ林
／＼危いからどけよ／＼」と言われた
位だつたのだから。故に中学の小
さい部員の面々も、失望するには
及ばない。

そして中学二年、書道部にはエ
ネ大会のみその出席率を誇り、専
ら部活動はサッカーに励んだ。こ
の頃、高校サッカー部の東日本大
会才四位や、全日本大会出場があ

つて我等中学二年の蹴球部員が二
十数名となり、空前?の栄華を誇
つた。初の対外試合もこの頃。県
下万年二位もこの頃から九期生に
ついてまわり出した。雪の降る日
、競歩会の翌日、八、九か九人で試
合したのもよき思い出となつた。

中学三年、いつも県下二位。棄
権があるやら宿敵一中に負けつ放
しやらで、試練の多い年であつた
。今思うと、失点はゴールキーバ
ー、リンキチの不手際によるもの
ばかりであつた。不思議なもので
、難しい球の及理は案外やつてい
るのに、失点に限つてさほど難し
い球ではなかつた様だ。夏であつ
たか、冬であつたか忘れたが、当
時のハーフ陣、左から大泉(驚く
なかれ、オイさんがレフトハーフ
だつたのですぞ)シユーティング

の時、ゴール近くでボカッとバー
を見事コンバートするキックで、
センターフォワード時代もその名
残りを留めていた事は誰でも御存
知のハズ?)田畑(彼氏、中学時
代は今程小さく感じられなかつた
から不思議だ。前にテツちゃん
が立つていると、何となく心強かつ
たものだ。)石原(今と変わらな
い。へへへ)の諸氏が、県
下でも優秀なる、素晴らしいハーフ
バックスであると岩淵さんから讃
められたのは、他人事ながら嬉し
くて仕方がなかつた。しかし、そ
の時の大会も二位、テツちゃん
讃められても嬉しそうな顔せず、
下唇をかみしめて泣いていたつけ
。(本当だぞ!)

高校一年になると、八期生に部
員が少なかつたのに恵まれて、我

々九期生は多くの試合に出場の機会が与えられた。少い上級生がガツチリしていて、下級生の我々としては最も働きやすかつた頃である。全日本大会の予選で録学に負けた時、スッゴイ、プールの様なグラウンドの土砂降りの中で、カエルの様にボールに飛びついていった時の事を思い出しても楽しい。

この様に書いて行くと、際限が無さそうだ。勉強について思い出を書いてみても、勉強とはあまり仲の良くなかつたリンキチであるからそう多くは書けまい。

兎に角サッカーに關しての思い出の豊富な六年間であつた。サッカーが何故にこう沢山の愉快な思い出を残してくれるか、それはサッカーをやる者だけが知つてい

ものなのだ。サッカーをやつて、泣いた。怒つた。そして耐え忍んだ。それでも楽しかつた。いつも最後には笑つた。トクさんの練習がきつくて参つた時には、練習終りのランニングを胡魔化したものだ。トクさんが「これで何周目だ？」と聞いたたら、「もう五周目です（実は四周目だつたのだが）」と皆で答える。そうすると、「じやあこれでオシマイの一周だ。」？？？部室に帰つて真相を聞いたトクさん曰く「……」（詳しい事はズイブン以前の「ダツシュ」参照）

早目に着換えると療の前の門の辺りで暗闇にまぎれて待ち伏せて、「タイ焼きオゴレ！」と恐迫する。そして熱いタイ焼きをフーフー言つて喰べた。今はそのタイ焼

き屋も何処かに行つて了つた。明るい電車の中で、友のオーバーにタイ焼きのアンコがついていたのを発見した時の喜び、百円玉を拾つたつてあんないい顔はしないだろう。

タイ焼きやあゝタイ焼きやタイ焼きや、

グラウンドの整備も今の様に立派に整つていなかつた。すゝきが原である。ボールそつちのけでバツタを追い駆けた日もあつた。草抜きは今と違つて、つい最近迄カマとクワを使つてやつた。雑草は強いもので、抜かれても抜かれてもどんどん伸び、そして増えてくる。サッカー部を象徴する様に。今の部員は恵まれている。時々妙な機械でサアーツと草を刈り取つてしまえばいいのだし、グラウ

ンドも立派だ。唯、先輩の築きあげた礎石と床と骨組に肉をつければ良い様なものである。強くなつて欲しい。勿論、勝つ事だ。しかし忘れてはならない事がある。単に勝負に勝つのではない。賞状が増えるのも大いに結構だ。常に学校を振り返り、部を振り返り、前進して欲しいと希う。こんな言葉がある。

「欲望があれば必ず利得がある。何故なら欲望はそれによつて一層増大するからである。

私は本當の事を君達に言おう。

欲望の対象の常に偽りがちな所有よりも、如何なる欲望にせよ欲望自体の方が私を豊かにしてくれた。」ージイド「地の糧」より。

ゴールキーパーへ一言

G・Kの志気は全員に影響を及ぼす程大切なものだ。一点ぐらいの失点にくよくよしなさんな。必ず味方が取り返してくれるのだから。しかしG・Kの完全なる失敗は、試合全体を左右する。最後迄球に、そして相手に食いついていつたにも係わらず、入れられたのなら仕方ない。「不可抗力」とはこんな時の為に使われた言葉なのだから。エラーほどつまらぬものはない。「後悔先に立たず」とはこの時の為に使われた言葉なのだから、

G・Kの練習は特殊なものだ。

不幸にしてか、幸にしてか、リンキチは競争相手がいなかった。だから謂ゆるシヨボイG・Kとなつてしまつた。(御諒遜でしょう。決してそんな事はありません。ー編集者) 競り合う相手がいると

、練習に於て、何かにつけて便利である。利用出来る時に相手を利用すべし。自分で工夫する事も必要。特殊であるだけに、練習がやりにくいであろうが、与えられた練習時間を適当に活用すべし。次に具体的なG・K心がまえ。(基本は、旺文社から出ている本「サツカー」を読め、)

キャッチング

(a) 自分の弱点を発見し、或いはアドバイスを受け、弱点を無くす様心掛ける事、(これはキャッチングに限らず。)

(b) 一度捕えたボールは、蹴り終るか投げ終るまで、死んでも

離さぬ覚悟で肌身離さぬ事。

(但し、制限以上ボールを持つて歩くとペナルティーをと

られるから気をつけろ！

(c) 高い球は（値段に非ず）最後迄目を離すな。犯人を尾行する刑事を見習え。最後迄見てゐるつもりでも、捕る瞬間は案外目がついていかないものだ。（バンチも同様）

(d) キーパーもダツシュしてボールをキャッチせよ。早いもの勝ちだから。だからと言つて、ダツシュしたばかりに捕れるボールを捕れなくしてしまわない事。

(e) 敵がドリブルして来るボールは、敵の足をタツクルする気持で頭から突込め、但し、タイミングが悪いとブザマだぞ

(f) キャッチングについて、まだ言いたい事があるが、この次の機会にそれをまわす。

キック。

(a) 正確なプレイス。キックは必要。ゴール・キックも積極的にやるべし。バックスが「俺がやる」と言つたら、強引に「俺にやらせろ」ぐらい言つてもよし。

(b) 手で間に合わない場合、スライディングしてキックするぐらい出来なくては駄目！（運動神経の発達している G・K はそれ位出来るはずだ。）

(c) G・K のキックは正確を必要とする。ゴロでもよし、例え蹴りそこなつても、それが味方のところへ到着する位にボ

ールを慣らしておくこと。

(d) 敵の前で蹴るな。例えそれで敵の一人を倒しても、はね返つたボールがゴールに入つてしまつたら何にもならない。
(e) エトセトラ、えとせとら、E T C。

セイビング

(a) ファイトが無ければダメ。

(b) 運動神経の発達していない奴は、この辺で G・K をアキラメロ。ボールがネットをゆすつてから体が地上を離れたのでは、お世辞にも「ウマイツ」なんて言えないからね。

(c) セイビングした時もボールを目で追うべし、地面が柔らかそうなところで、セイビング、ヘッドを練習するぐらいの

無茶をやるといふかも知れない。(あまりやつた経験が無いから断言出来ないが。)

(d) 左右の区別なく飛べるのがKである。いづれか一方なら、十人のうち八人までが出来る。

(e) その他。(自分で思い当る事があるだろうから。)

スライディング

(a) キックのところで述べた外に、スライディング、アタックもやれる様にしておこう。

(b) ドリブルしてくる敵の軸足をねらつてスライディング、アタックして、手でボールを捕える練習も時折やつてみると良い。

パンチ

(a) 正確さを要す。

(b) 長い距離を飛ばした方が申し分無いが、パスする事が肝心

(c) 敵、味方の区別なく、頭も一

(d) これもフアイトが才一。

精神状態

正常が良し。

この辺でペンを置こう。「憂鬱はひとえに冷めた情熱に由来する」

サッカーへの情熱は、いつ迄もリンキチの胸の底で燃えているだろう。憂鬱なんて、誰だつて厭なものだからな。

WHERE THERE IS A WILL--

9期生 内山正樹

栄光サッカー部の現役としての六年間が今正に終わろうとしている。六年間をふり返つて何かを書こうとしているのだが、いろいろな事が頭に浮んできて何かに書いてよいのか分らない。それでも一番強く感じる事は、何といつても「意義のある生活が送れて良かった」と云う事である。ごく当然の事だが、高校生活を終る今になつて特にこの感を強くしている。試合練習を通じての忍耐力の鍛練、逆境に立つた時の精神力の鍛練、試合練習以外の

部活動を通じてこの考える力の鍛練、これが僕に与えた益は多大なものであつた。

意義のある生活を送る事が出来た六年であつたと同時に、実に愉快な楽しい六年であつた。思い出す事が全て楽しい思い出である。暗くなつた練習の帰り道で篤さん（四期生泉頭さん）を襲い、タイ焼きを食べた事。篤さんと練習後のランニングをかけて相撲をとり、やつけた事。正月に山小屋で語り明した事。部室で馬鹿げた事を言い合つて大笑した事。猛練習の後のランニングで皆でうまくバテている篤さんをだまし、一周ごまかした事もあつた。試合に負けた事も数度ならずあつた。しかしそれは悲しい事ではなかつた。次の段階へ進む一つの試練であつた。

この様に愉快な生活を送れたのは、一つには僕達九期はついていたのかもしれない。何しろ中Ⅱの頃は先輩から弱い弱いと言われながらも、指導者に恵まれ、中学の大会では優勝同様の成績を始められたのであつた。一人の先輩に指導された結果として、中学の時に高校生と接触する機会がほとんどなかつた事も事実であつた。しかし僕達にとつては、高校生との接触の少なかつた事を差し引いても、あまりある篤さんの指導だつた。精神的にも技術的にも九期は篤さんに鍛えられたのである。全く篤さんには感謝している。高校に入つてからも、あまりバツとした成績はあげられなかつたが、僕達はついていた。ⅤⅠの時からどんどん試合にだしてもらえたし、ⅤⅡ

になつてからは十期という恰好の相棒を得て、スムーズに張りのある部生活を送る事ができた。九期と十期は不思議な程に馬があつた。何をするにも一諸であつたし、トラブル一つ起こらなかつた。ⅤⅡになつてからもこれは同じ事だつた。全く何故あれ程に馬があうのだか、今もつて分らない。何はともあれ、実に住心地の良い所だつた。まだまだ離れ難い気持が強い。先輩になつても、あの部室の香りがなつかしくならない程度に、遊びに來たいと思つてゐる。

こゝで、現役を去るに當つて後輩に是非言つておきたい事を書いてみたい。言いたい事はたくさんあるのだが、三つだけにしぼつてみた。

才一に根性を持てと云う事である。相撲で関脇に北葉山と云うのがあるが、この人は専門家の間でも非常に根性があると言われている。八勝七敗の事は多いがめつたに負け越さないのである。この場合の根性があるとは、どんな体勢になつても、いくら自分の不利な体勢になつても何とか相手をやつてやろう、と云うフアイトを持つてゐる事を言うのであろう。サッカーにおいても全く同じである。たゞ相手の相撲さんが個々の技術に代るだけである。即ち、僕が言いたいのは、何とかして一つ一つの技術を身につけてやろうと云う意欲―不可能を可能たらしめんと云うフアイト―を持つて、と云う事である。誰でもうまくなつてやろうと思つてゐるだろう。しかし、

たゞ漫然と思うだけでは駄目なのだ。英国に *Where there is a will, there is a way.*

(意志のある所に道がある) という諺があるが、大切なのはこの意欲なのである。

才二にこのDASHの事である。後輩諸君はこのDASHを見る時どういう氣持で見ているだろうか。恐らく單なる作文集を見る様な氣で見ているだろう。それでは、何のためにサッカー部はDASHを出しているか考えた事があるだろうか。これも残念な事がないだろう。意義を認識しないまゝで、DASHを作る番が廻つて来たらどうだろうか。原稿を書いてくれ書いてくれと頼み廻つて、どうにか発行されるであらう。しかし、そこにできたDASHは本当の作

文集になり果てるに違いない。僕も編集の仕事をしたのだが、自分なりにDASHの意義について考えたつもりだ。僕の考えを簡単に言えば「一つには部生活を豊かなものとするためのものであり、一つにはフアイトが大きく物を言うサッカーにおいて、強固な精神力を形成するための助けとなるものであり、一つには部をまとめる手段となるものである。」という事になる。別に僕はDASHの意義5を規定しようとは思わぬ。たゞ後輩諸君にDASHの持つ意義を考えてもらいたいのだ。目的意識を持たぬ行為はいつかは崩れさるものである。確固とした考えのもとに、このDASHをますます盛り立ててほしい。

才三に伝統を育てて行けと云う事

である。この間引出しの整理をしていたら、一枚の紙が出て来た。それに次の様な事が書いてあつた

「サッカー部に於て重要視されるもの、それは成績ではない。技術ではない。勝利ではない。いかにしてその成績を得たか。いかにしてその技術を得たか。いかにしてその勝利を得たか。サッカー部に於て重要視されるのは、いかにして戦つたか」であるのだ。勝利に対する執拗な願い、それがいかに高いものであり、いかにその行動として表れたか、それが問題なのだ。：。その結果が勝利であろうと、敗北であろうと、そんな事は問題外なのだ。

困難に雄々しく荒々しい意欲をもつて対決し、そして得たも

の、不可能を可能にせんとして得たもの、それが重要視されるのだ。」

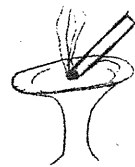
正にこれが栄光サッカーの伝統だと僕は言いたい。決して強い事が伝統ではないのだ。後輩諸君にこの言葉を心において、伝統を育てていく事をお願いする。伝統を維持するだけではだめだ。栄光サッカーはまだ十才にもなっていないのだ。どんどん育てていかななくてはならない。

最後にもう一度繰り返す。

Where there is a will, there is a way.



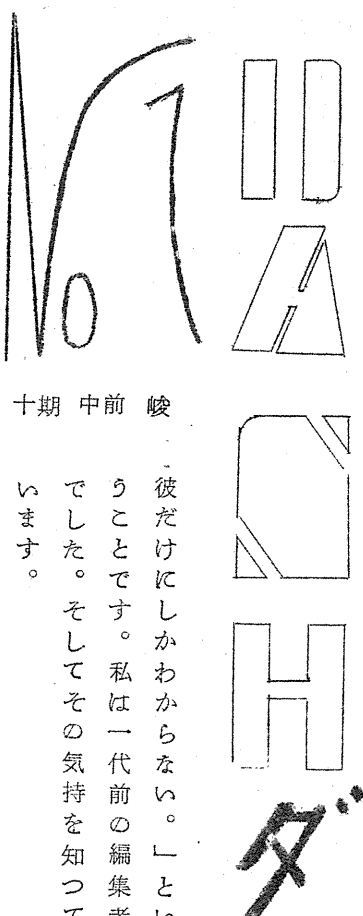
キツエン禁止



人を呪わば

ⅨⅨ君、流感であちこちの学校が休校、のニュースをきいて羨しがることしきり。「みんな流感にかゝらねえかなあ、どうして休校にならねえんだろう」とぼやくこと、ぼやくこと。他人がかゝつて自分丈はピンピンして、学校は休み、ととらる狸の皮算用。ところが、ところがです。流感にかゝつたのは彼ノ遂にⅨ君は一人で学校を休むことゝは相成りました。

古諺に曰く「人を呪わば穴二つ」



峻 前中 期十

三年ばかり前のエマスの集いに「石刀」という劇が上演されたのを覚えてゐる諸君がいるでしょう。その劇の幕切れに「石刀を持つものの気持は、石刀を持つものにかわらない」という一節があつたのを私は覚えてゐます。私は今この言葉を痛感してゐます。「ダッシュ」を編集するものの気持は

彼だけにしかわからない。」という事です。私は一代前の編集者でした。そしてその気持を知つてゐます。

私は編集者が仕事に取りかかる前の希望を知つてゐます。その抱負を知つてゐます。その張り切り様も知つてゐます。

私は人々に原稿を提供してくれよう頼む苦勞を、あつかましさ、嫌らわれ役となるつらさを知つてゐます。

そしてその希望がふみにじられ

原稿が集まらない時の焦りと絶望を知つてゐます。しかし私は、新しい『ダッシュ』を手にした皆の喜びも知つてゐます。私は、才七号の編集によつて、かようなことを知りました。そして最後の喜びを知つたので敢えて、才八号という難関にぶつかり、そして皆の喜びを得たのです。

今までに『ダッシュ』を編集した人達は皆私の知つたことを、各々、夫々の時代で知りました。ですから、彼等自身の味わつた苦しみの後輩に繰り返させまいとしてカウイ所に手が届くような助けを与えて呉れます。

諸君、あなたがたは、この編集者の悩みを考へて呉れたことがありますか。おそらく、ないでしょう。親身になつて考へて呉れたこ

とは。私は考えて欲しいのです。

私は嘗つてある部員に云われました。「おい、そんなこと云うと、原稿書いてヤンネーゾ。」彼にはわかつていなかったのです。編集者の苦しみどころか、『ダツシユ』の存在の意味もわかつていなかったのです。

苦しみが多い程、完成した時の喜びは大きい。それはそうです。しかし、別に大して苦しまなくても、それが部員の協力から成つたものなら、編集者はうれいのです。編集者の役目を果し終えたことになるからです。そうそう、諸君、編集者の仕事というのは、部員の協力を一まとめにすることであつて、自分の力だけで『ダツシユ』を作り出すことではないんですよ。

なんだから、まとまりのないことばかり云つてしまいました。が、諸君、君がこの文を読み終つたら、一度、本を閉じて下さい。そして目をつぶつて、吉川さんの、中前さんの、内山さんの、佐久間さんの、奥田さんの、夜遅くまで必死に『ダツシユ』を作つてゐる姿を思い浮べて下さい。そして、本を開いて、読み終つたら、すぐにでも原稿を書いて下さい。

まだ云いたいことがあります。『ダツシユ』は試合報告雑誌ではありません。部員の教養雑誌です。サッカーを通じる一貫の情操教育の一機関なのです。皆さん。詩和歌、俳句、洒落、何でもいいです。サッカーに関係ない？ いやいいんです。君はサッカー部員でしよう。それだけでいいんですよ。

最後に『ダツシユ』はこのサッカー部の続く限り続きます。何百号のダツシユもでるでしょう。私達の死後も。そのごく初期の号に私達の、君達の作品がのるのです。未来のサッカー部員はこう云うでしょう。「才十号のダツシユには、とても沢山原稿がのつてゐるね。才九号にあつたあの文のせいか？ まあそれにしても、百年も前によくこんな美しい本ができたなあ。さあ二百四十号の製作だ。今号は才十号にまけないように作ろうや。」

さあ、百年後の部員にこう言わせるのは君達です。

おわり

私

サッカー

ユシツダ

十一期 吉川

威

早いもので、サッカー部に入つてから早五年目となつた。小学校の頃、母の従弟が大学サッカーの才一線で活躍していたので、栄光に入つた時、当然の様な気持でサッカー部に入部した。それから四年間、何という事もなくサッカーをやりつゞけ、今ではサッカーなしには僕の生活は考えられない程までになつてゐる。今迄目立つた活躍もせず、たゞサッカーが大好きだ、というだけでサッカーをやりに続けて来たのだが、今年の部の中心の学年となるに當つて、何と今迄あまり積極的の協力はして来なかつたDASHの編集責任者に任命されて了つた。その仕事を実際にやつてみて、今更乍らそのむ

つかしさ、大変さに驚いてゐる次才である。何しろこの編集者というのは、おそろしく氣を使い、又忍耐力を必要とする仕事である。原稿を頼んで、鼻の先であしらわれた時の口惜しさは、経験者でなければわからないだろう。僕は、部員全員が、一ヶ月交代か何かで皆が一度必ず編集者の経験をしてくれないだろうか。など、本気で考えた。そうすれば、よもや二度と原稿を嫌がつたり逃げたりする事はなくなるだろうから。さてこゝでDASHの宣伝をさせていたゞきます。下級生諸君は誰でも一度は直接は話にくい、上級生に聞いて貰いたい不満、その他の氣持を持つた事があると、そのハケ口、又伝える手段として、DASHを利用して欲しいのです。DASHは君達全部員の雑誌です。僕はもとより、上級生の

雑誌ではありません。原稿を書くのに、何の遠慮もいらないので。遠慮等しないで、思つた事は何でも卒直にそのまゝ書いて、編集者に渡してくれ、ばよいのです。出した時期によつては、発行迄に時間がありますが、書こうと思つたらすぐに書いて下さい。又あとで、などと思つと、忘れて了つたり、ついおつくりになつてやめよう、という事になり易いのですから。十三、十四期の皆さんには今回以上の、十一、十二期の方々は非常な努力、協力をお願いします。八号でも、今号でも前編集者中前さんが強調されているように『DASHは編集員が作るのではない、皆が作るのだ』という事をしつかり頭において、御協力を切にお願いして筆を置く次号です。

力考モク

随	筆
---	---

輝生 英晶 野田 唯町 十期

唯野

一考目

人間は死ぬまで生きているもので又便利な事に一度しか死なない。だから生きているうちに何でも経験して見る事だ。勉強したい者はそれに夢中になり、サツカーをやりたい者はそれに夢中になる。

今やつている事は一生に一度しか出来ない事かもしれないのだから一生懸命やる事だ。しかしやる以上はしつかり計画をたててやる事だ。そして失敗したら又別の方向へ別の方法で進んでいつて人間は生長する。

二考目

練習中こんな事を思つた。「サツカーは足を使う競技でなくて手以外の全身を使う競技である。」

三考目

勉強しながらこんな事を考えた「勉強は追われるものでなくて追うものだ。しかし『追う』という事はすでにそれ自身『追われている』事だ。」

四考目

山を登りながらこんな事を考えた「山は美しい。特にその冬の姿

は雪と岩とがきれいに見える。写真家に云わせれば白と黒とのコントラストがすばらしいと云うだろう。そして又その大自然が自然に彫刻し色彩した造形の美しさには表現しがたい芸術のすべてを秘めている。」

五考目

泳ぎながらこんな事を考えた。「海は広く大きく深い。山は立体的だが海は平面的である。だからある意味において山の方が恐ろしい。なぜなら海なら同じ平面に人が沢山いるが山ではその平面に自分だけしかないからだ。でも海もヨロシツクである。この私の泳いでいるずつと遠くの海できれいな人が泳いでいるとも考えられるからである。気の大きな話だが。」

六考目

地面に立つてゐる時こんな事を考えた。「地面は何の爲にあるのだ。」

七考目

鏡を見ながらこんな事を考えた。「花は人の目を喜ばすもので鼻は人の目をかなしませるものだ。」

八考目

電車に乗つてこんな事を考えた。「電車は人を運ぶ爲にあるのでなくて人をどれだけ詰められるか試すためにある。」

九考目

考えながら考えた。「どうしてこんなくだらない事を考えるのだ」

部室雑感



町田

僕は中二のときサッカー部に入

つてから、氣になつていたことが一つあつた。サッカー部の部員は、皆愉快な人達ばかりなので楽しい毎日を送つていた。それでも僕には氣になることが一つあつた。

なつた。そのとき、僕は志願して部室の責任者になつた。汚い部室を少しでもきれいにしようと考えたのだ。

それは何だろうか。それは校長から睨まれるものである。部員以外の者から嫌われるものである。しかし、サッカー部員ならば、それは命から二番目に大切なものである。一体、お前は何をそんなまわりくどいことを言つてゐるんだと思われるかもしれないが、実は僕はそれが言い惜いのである。しかし、言い渋つた所で何もならない。それは部室だ。何故言い惜いかといえ、僕は人一倍部室が好きだからなのだ。僕はこの一年間部室の掃除責任者だつた。去年の一月、部の幹部が交代し僕達の時代になつた。そのとき、僕は志願して部室の責任者になつた。汚い部室を少しでもきれいにしようと考えたのだ。昔の部室は実に汚かつたという。今の部室は非常に清潔であるかのようだが、印象が深い。スパイクの泥あり、汗と垢と泥のシヤツあり、何度掃除しても消えない埃あり、ものすごい臭の油ありで、全く「不潔」以外ふさわしい形容詞が無い位だつた。其の上不潔の固まりのような御仁がたむろしてゐるのである。その惨状を想像するに、これ以上簡単なことはない。とにかく最初のうちは、汚さと臭さが、幼くいたいけなかつた僕を圧倒した。しかし、どんなに臭くても汚くても、部室はいつも明るい雰囲気

に満ち満ちていた。僕が中二の頃は、

佐々木民さんや生駒さん等が部室の主だった。生駒さんが、くだらないことを言うと、皆馬鹿みたいに口をあけて他愛なく笑う。

壁にボールをぶつけて、皆で奪い合う。生駒さんが足りない身長をカバーするためジャンプし、それを尻目にスネの長い青木さんが悠悠と取る。そんな他愛はないが実に楽しい毎日だった。そして、その明るい笑い声は今でも依然として、いや今の方が大きいかもしれないが、変わらない。しかし、諸行無常とはよく言つたもので、時代は変つた。今ではその笑い声の合間をぬつて、ボールの空気を入れているモリチャン（矢島）や高一の姿を見るのが日課となつた。中二の頃は練習の間際以外あまり

見たことはなかつた。

部室は又、サッカー部員の憩の場所だ。サッカー部のパラダイスである。先ず登校するや否や部室に飛び込む。いつも同じ顔の連中と、いつもと変らぬベチャクチャ

をして、その日の始まつたことを知り、カバンを誰が持つていくかでジャンケンをして、その運勢を見、ノートの貸し借りをして現実の厳しさを思い出す。雨天日課の休み時間には、「この部屋、寒いなあ。」と、文句を言いながら、実に楽しそうに顔を揃える。そして、セツケン馬鹿だの宇佐美さんは下らないだのと、授業のケチをつけ合う。昼休みにはガタガタ震えながら弁当にかぶりつく。放課後になれば、その日一日のエピソードの披露式である。色々馬鹿

気たことを話しては大声で笑い合う。そんな、他人が見れば実に馬鹿らしい実に幼稚な、しかし僕達には実に気持のよい愉快な部屋である。

さて、僕が部室の責任者になつてから、仕事はきわめてスムーズに運ばれた。責任者自らホウキを持ちバケツを下げ陣頭指揮に立つた。現高一をビシビシ働かせた。運動場に出張して部室に引ずり込んで掃除をさせた。部室清浄化運動の火蓋を切つたのである。しかし、相手は摩可不思議はサッカー部の部室である。ホウキでも、グロップでも、バットでも、ホームベースでも何でござれの部室である。ちつとやそつとで埃と泥が無くなる筈がない。

それどころか、汗と油にまみれたトレパンと紐のない運動靴が増えるばかりである。しかし、負けずに、ホウキを使い、水をジャブジャブまいて掃除をした。けれど、すぐ汚くなるのだ。キレイなのは、掃除し終ったときだけである。

まったくサッカー部の埃は、世界の七不思議の一つであるかと思われる位である。何度掃除しても消えないのだ。道端の雑草のようである。夏の合宿は部室のモットーを「清潔」として、大いに掃除に努めた。しかし、学校が始まると元の木阿彌である。とうとう僕は負けてしまった。熱意が無くなつてしまった。係を決め、掃除をやらせるのも面倒だった。やる気も無くしてしまった。部室が汚くてもそのまましておくばかりだつ

た。こんなことではいけないと思つたこともあつた。しかし、それもそのままだつた。そして責任を果さないまま僕達の時代は終つてしまつた。なんとも言い訳けのしようがない。

さて、僕は何度も部室が好きだと言つてきた。一体どうして僕は部室が好きなのだろう。こんなに部室が好きなのは僕だけなのだろうか。そんなことは無い筈だ。誰でも皆この部室が好きなのだ。ではどうして部室は皆をひきつけるのだろうか。サッカー部員としての誇りがあるからだろうか。それも確かに一つの理由にちがいない。しかし、もつと他に何か……何かあるような気がする。部室は便利だからだろうか。そんな単純なことではなさそうだ。では一体

何だろう。そうだ。それは部室の雰囲気にかがいない。部室には飾らない、気取らない魅力があるのだ。あけつびろけで、率直な自由があるのだ。どんなに汚くても、どんなに寒くても、部室の空気はよどみなく、暖かい。笑い声がある。愉快な友がいる。イヤな奴は一人もいない。そこは、僕達だけの世界だ。笑う者、泣かない者、愉快な者の天国。それがサッカー部の部室だ。部室は不屈な男の牙城だ。さあ、この城を滅すな。取られるな。もつと堅固な城を築け。日本一、世界一の城を築け。



丹沢遊日

有本乃記

十一期 成宮隆夫

12月30日（金曜日） 快晴

今日は、僕が初めて丹沢に行く日であり、又初めて山で年を越しに行く日でもある。朝久しぶりに早く起きたためか？けつこう眠むかった、天気は大変良好で朝にもかかわらず暖かい位らいである。絶好の登山日和である、ああ我々はなんと幸福なんだろう！8時24分大船駅から東海道線に乗り込んだ、通路を後へ後へと進んで行く、リュックがじやまである、腰掛にでれでれとぶつかっている。やつとの思いで皆んなのいる所にな

どりついたが、あまりにも少なすぎる。高I宮坂。吉川。成宮高II林。矢島。町田。宮杉。中前。佐藤。新井の10名である。太田。清水の2氏は来られないそうである。平塚に近づくにつれて丹沢の山々が、はつきりと見えて来る、山には少しの雪が残っているのが分かった。平塚で下車し、そこからバスで大秦野へ、バスの中はすいていた、バスの中で佐藤さんは、石原さん市村さんのろ人で参加した合宿について話してくれた。丹沢の山々は増々近づいてくる。大秦野から再びバスで蓑毛まで行く、皆んなすわれた、中前ゴンジさんの言によると、このバスの車掌は、いかにもこの私の乗っているバスは、蓑毛へ行きますという顔だそうである、なるほど僕にもそう思える。蓑毛には、サルがいた（オリ箱入り）。林さんが近道をしようと言つて、先頭に立ち登山開始。しばらく行くと北向の斜面に雪が残っているのが見える。もうバテて来た、どうもこの調子だと先が思いやられる。足もとでは霜柱がザクザク音をたてている、後方には江の島、三浦半島、房総半島、遠く大島まで良く見渡すことが出来る。沢に沿つてどんどん登って行く、もうめちやくちやにバテて来た。林の中で、雪を見ながら小休止、タオルで汗をふくと、スーッと谷間から吹き上げる冷風が、ほおをなでる。一息ついてから又登り初める。とうとう沢に出てしまった、どうも道を間違えたらしい。沢を登つて行くと、林道の石垣が見えて来た、これで喜

ぶのはまだ早すぎる、實際はそれからが大変だつたのである。右側の岩場を登ることにした、これはなかなかのスリルがあつた。登りきつた所で小休止した。しばらく上つて行くと、すごい急な斜面の草原？に出た。道なき道を林道の石垣目指して進んで行く、途中で佐藤さんが足をすべらし2m位い落ちる。頭上を見ると林道がある、なんだ馬鹿らしいと思いつつ、真すぐ上に登つて行く、足もとがザラザラすべつてなかなか登れない。やつとのことで林道に着き、ほつと一息ついた。ああなんと気が良いのだろう、ヤビツ峠までの間には所々雪が残つていた。雪の上を歩くのは大変気が良い。宮杉さんが途中できれいなスライディングを見せてくれた。ヤビツ

峠では、待望の昼飯を食べた、ここからの景色はなかなかよい。長い間休んでいると大分冷えてくる。ここから小屋までは、林道をだらだらと下つていつた、途中青山荘にガニマタの犬がいた、日の当たっている所は霜が溶けてぬかつていて、歩きにくい。どうやら目的物、栄光ヒュツテが見えて来た。急に体がつかれてきた様に感じる、足ががくがくである。小屋にはブルカ先生がいた。ドイル先生はじめ他の部員は我々をむかえに行つたのだそうだ。皆んなでストーブを囲みながらお茶を飲んでいると、市村さんがおくれてやつて来た、彼は大船で一本乗りおくらせてしまつたそうだ。一休みしてから、リユツクの整理をし野菜・米・餅を出した。外でまきを割つて

いると、テツちゃんが山から帰つてきた、少しおくらせてドイル先生、松田さん、モリチャン、唯野さん、阿部さん達も帰つて来た。夕飯はカレー粉がなかつたので、カレーライスはやめて、ブタ汁を作つた、腹がすいていたため非常においしかつた。食後皆んなでボーカ―をやつた、多人数でやるためにHofが沢山生まれる、Hof どうしジャンケンをして負けた者が1人減つていく、そのつど敗北者は帽子あるいは他の物を出さなければならぬ。武ちゃん早くからジャンパーをはぎ取られていた。ドルカ、ブイル両先生も熱中している、とくにブルカ先生は猛烈につばをとばしながらの大熱戦である。僕はHofでなかつたのは2。3回位いだつたが、決勝戦にま

で進出した。いい加減遊びつかれてから、10時頃寝た人数があまり多くなかつたので1人当り布団2枚毛布5枚位いづつであつた。相当つかれていたので、すぐに眠てしまつた。

12月31日(土曜日) 快晴

あゝ寒い寒い、昨晚あれだけの物を着こんだにもかかわらず、首・耳・足が凍りついてしまうのではないかと思われるほど冷めたかつた。大山経由で、今日来るやつらを出むかえに行く人々は、起きていた。僕は林道を通つてむかえに行くつもりだつたが、宮坂・吉川が起きたので、僕も起きてストーブにあたつていた。大山へ行く人々と共に飯を食べてから、水源の方に、研と吉川のう人で遊びに行つた。水のある所必らずつら

らありであつた。小屋に帰つてから再び沈澱組と飯を食いなおした、なんだか腹の調子が変わである。11時頃新井さんと宮坂と三人でむかえに行つた、昨日とはちがつてぐんと身が軽い、新井さんの足の速いこと。青山荘のそばで高うの方々が弁当を食べているのに合つた、葉山、田島は後の方からゆつくり来るそうである、高うと別れてさらに、進んで行くと、ヤビツ峠の少し手前で、田島、葉山と朝山に行つた人々と出合つた。宮坂と僕は一応ヤビツ峠まで行くことにした、ヤビツで乾パンを食べ、再び引き返した、途中道なき道を少し登つて小さな尾根に出た。雪の上にはうさぎ等の足あとが沢山あつた。そこから見る富士山、箱根方面は非常にうつくしかつた。

下り坂で宮坂と雪の上をすべつて行つた、なかなかよくすべるものである。面白かつたゾ。富士見橋の方を回つたり、変んな道に行つたりしたので、小屋につくころには、ゲテゲテにバテていた。宮坂もさぞかしつかれた事だろう。夕飯の後で反省会があるので、何を言おうかなど考えながら横になつて休んだ。小島はおくれて来た。反省会の最中にボケさんが来た、反省会是我々高1のために、ずいぶんあつた。年越そば、お菓子等を食べながらやつていたら11時半にもなつてしまつたので、明日の御来光に行くのは、雨のため中止と云うことにして、高1は寝ることになつた。しかしランプを寝床に持つて行つて田島、小島、葉山、吉川、僕のう人は花札。ナポレ

オン等のゲームを2時頃までやつて眠った。

1月1日 (日曜日)

今日は、年が明けて一九六一年一月一日である。例年の様な正月気分がしないし、昨日の疲労と睡眠不足のため、気分がさつぱりしない。昨晩から菊野先生が来ている。ミサの為信者を除いた者が、食事の準備をした、餅の沢山入っているお雑煮とおせち料理(あまり美味でない)を食べると、なんとか正月気分が出てきた。ボケさんとカンパン等の昼食を持つて、小屋―丹沢林道―本谷川林道―長尾尾根―小屋のコースに行くことにした。小屋からドルカ・ブイル両先生と共に出発、先生達は物見峠を通つて下山するそう。途中で発電所を見学といつても、小さ

な無人小屋に1台の発電機が置いてあるだけのものだ。先生達を送つた後、林道をスタスタ進んで行く、所所に大きなつららが見える。小さな沢や滝もある。(沢・滝はそれぞれ凍っている沢・滝と言う意。)大洞隧道の少し手前で林さんのくつの底がパツクリと口をあいてしまった。モリチャンは塩水橋のそばの木にかけてあるマフラーをチョット失敬(同意の上)した。本谷川の石の上で、カンパンに沢山のバターとジャムを付けて食う。石は僕のザツクが、凍りついてしまつていたほど冷めたかつた。それから、テクテクとてくる。疲労と睡眠不足のため身体はふらふら、頭はくらくらする。特に回わり道をしたのと、まぎをしよう

屋までの間は、頭はがんがん、身体はばたばたで死にそうである。アア、この様な辺鄙な所で16年の平凡な人生に終止符を打たれるなんて、おれはなんと不幸なんだろう。と思つたこともある。小屋に着いたとたん、小屋に生きて帰えれたうれしさで、胸がいつぱいであつた。それから少しのエネを食いながら寝た、外では、雪が降っている。研か東平に、飯の準備の為に起こされたが、頭はモウロウとしてゐる。夜皆んなが騒いでゐる時、めちやくちやに疲かれています。ため、先に寝させてもらつた。寝てゐると、皆んなの歌声が聞こえてくる。

1月2日

朝ななく目があいた時、寝た時よりもだいぶん寒いを感じた

、毛布をだれかに取られたかなと思つて、うちにも又目が閉じてしまった。それから2時間ほどたつて、8時少々過ぎた頃だと思つて、目がパツチリと開いた。11、12時間あまり寝たことになる、昨日の睡眠不足は、どこえやらすつ飛んでしまつた。今日も相変わらず寒い。昨日の夕方降つていた雪は、雪がくれしてしまつたらしい。我々2、3人は朝飯前にある程度帰えり仕たくをした、リユックは行の半分位になつてしまつた。朝飯後最終的な帰えり仕たくをした、この時まだエネが沢山残つていたので1ヶ所に集め帰える途中で食う事にした。それから大掃除である、僕は土間の掃除をした、石原さんは背の高いのを生かして、煙突掃除をした。ものすごくすすが

出てきた。小屋での最後の飯には、罐詰を開けた。僕は無理をして腹につめたため、後で困まつた事が起きた。高16人は、飯の後すぐに小屋を出発し、物見峠に向つた。林道に出るまでに、もう腹の調子が変わりになつてきた。小島と葉山はゆつくりとおくれて歩いてくる。林道を15分位いった所から右に曲がり、森林の中を下つていくと、布川に出た。川には直径20、30cmの一本橋がかけていた、それを渡るには非常なスリルがあつたが、皆無事通過出来た。ここから一ノ沢峠までは、上りばなしである。峠に着くまでに食過ぎがたたつてバテてしまつた、途中幾度も、休息を申し立てたが受け入れられなかつた。一ノ沢峠にはトテム・ポールが立つていた、そ

こで僕はシャツの下に着ていたセーターを、脱いだ。そのためにグット体が冷えてしまつた。雪の少し積つた尾根徑をどんどん下つていく、唐沢川を渡たり少し行つた所で、小休止をする。ここから物見峠までは、炭焼小屋や農家がボツリボツリとあるだけである。物見峠でエネを全部食うつもりだつたが、残念無念食いきれなかつた、ここからの三の塔、塔の岳、丹沢山の眺めはよかつたが、残念にも三浦半島の方は霞んでいて、全んど見えなかつた。峠を後にして山腹の徑をとぼしながら下つた、早く家に帰りたい気持と一諸になつて足は、ピストンの様に動いている。麓の方に部落が見えて来た、田は何んでだか知らないが真白である。やつと湯出川橋に着いた

、町にはどことなく正月気分が漂
 よっている。葉山と小島は勇しく
 もここから本厚木まで歩いて行つ
 た。残の僕達は、バスに乗つて本
 厚木まで行つた。バスは非常に混
 んでいて座われなかつた。本厚木
 からは、田島、宮坂と別れ、吉川
 と2人で平塚へ向つた。バスは丹
 沢山塊を右に見ながら、南へ南へ
 と進んで行く。車窓から見る町の
 様子は、来た時と大分ちがつてに
 ぎやかだ。平塚駅で電車を待つて
 いると、大泉、石原、佐藤の3氏
 がやつて来た、彼らはヤビツ峠を
 通つて帰えつて来たそうだ。電車
 は臨時の平塚発であつたので、皆
 んな座われた。鎌倉で皆なと別か
 れ、やつと僕のネグラに帰えるこ
 とが出来ましたトサ。

|| U N H A P P Y E N D ||

昭和 3 5 年 度 中 学 校 成 績

年 月 日	相 対 校	種 類	得	失	勝・負
1月24日	聖 光 学 院	練 習 試 合	3	2	○
5月22日	藤 沢 一 中	◇	2	5	×
6月 4日	横須賀学院	◇	9	0	○
6月26日	末 吉 中	県大会二回戦	2	1	○
7月21日	六 角 橋	練 習 試 合	4	0	○
10月 9日	片 瀬 中 A	◇ (栄光A)	4	1	○
◇	片 瀬 中 B	◇ (栄光B)	6	1	○
10月23日	藤 沢 一 中	◇	3	1	○
12月26日	岡 村 中	県大会一回戦	5	0	○
12月27日	吉 浜 中	◇ 二回戦	6	0	○
12月28日	片 瀬 中	◇ 準決勝	3	0	①
◇	藤 沢 一 中	◇ 決 勝	2	3	×
通 算 10勝 2 敗 得 点 49 失 点 14					

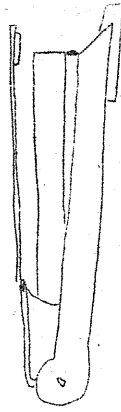
勝 率 8 割 3 分 3 厘

1 9 6 0 年 度 高 校 成 績

月 日	会 場	相 手 校	試 合 種 類	得失点	勝敗	率
1 7	相当校	県立緑ヶ丘高校	練 習 試 合	5 - 0	○	100
2 14	県営ク	鎌倉学園高校	新 人 戦 才 一	1 - 3	●	・50
3 20	相当校	県立鎌倉高校	練 習 試 合	4 - 0	○	・66
4 24	〃	県立希望ヶ丘高校	〃	3 - 0	○	・75
4 29	栄 光	県立鎌倉高校	〃	3 - 2	○	・80
5 8	県営ク	慶 応 高 校	関東大会県予才一	3 - 2	○	・83
5 15	県鎌グ	法 政 二 高 校	〃 才二	5 - 0	○	・85
5 22	県営ク	県立翠嵐高校	〃 才四	5 - 0	○	・87
5 28	〃	鎌倉学園高校	西 A リ ー グ	5 - 1	○	・88
6 4	〃	日大藤沢高校	〃	5 - 0	○	・90
6 5	／	関東六浦高校	〃	不戦勝	○	・90
6 11	県営ク	藤沢藤嶺高校	〃	2 - 0	○	・91
6 12	県鎌グ	県立茅ヶ崎高校	〃	4 - 0	○	・92
6 25	県営ク	県立湘南高校	関東大会 県 準 決	2 - 1	○	・92
7 16	〃	相 洋 高 校	西 ブ ロ ッ ク	2 - 0	○	・92
7 23	〃	県立希望ヶ丘高校	県 王 座 決 定	3 - 2	○	・93
7 27	水戸競	山梨日川高校	関 東 大 会 才 一	3 - 1	○	・93
7 28	水戸球	東京大泉高校	〃 才二	3 - 1	○	・94
7 29	〃	埼玉浦和西高校	〃 準々決	0 - 3	●	・88
8 14	県営口	鎌倉学園高校	国体県予才二	0 - 6	●	・85
10 8	栄 光	県立鎌倉高校	練 習 試 合	6 - 0	○	・85
10 22	〃	鎌倉学園高校	〃	1 - 0	○	・85
11 13	／	吉田島農林高校	全国大会県予才一	不戦勝	○	・87
11 20	県営口	県立多摩高校	〃 才二	5 - 0	○	・88
11 23	県営ク	鎌倉学園高校	〃 才三	0 - 2	●	・84
			計	70 24		

25 戦 21 勝 (含 2 不 戦) 4 敗 8 割 4 分

編集後記



初めての編集の事として、大変手間どつて了つて、そのわりに内容の充実の見られないDASHになつて了つた事を、皆様におわびします。責任者としては、いくえにもおわびしますが、しかし皆様にも大いに責任があるのです。というのは、私が原稿を書いてくれる様にタノンダへちやんと頭を下げて、時、気軽に、気持よく引き受けてくれた人が何人いたでしょう。又、しぶしぶでも、大低の人は一度引き受けてはくれました。しかし、実際に書いてくれたのはその半数という情なさ、始めから受けて受けない奴、頭から冷笑

する様な態度で、知らん顔をきめ込んでいる奴さえ居りました。元来気の短い私にとつては全く良い精神修養になりました。(これは皮肉です)せめて彼等がボールを追う時の半分の、いや十分の一のフアイトを出して原稿を書いてくれたら、どんなに立派な原稿が、どれほど沢山集るかと、つくづく情なくなりました。そういう奴に限つて、DASHが出来上ると批評(というよりアラサガシ)をしたがるものなのです。

今度のこのDASHの編集に一番協力して下さつたのは、卒業を控えて一番忙しい筈の高三の方々でした。ついで中一、中二の下級生。中三、高一はひどいものでした。高二はさだめし立派な原稿を多数書いて下さるだろうと期待し

ていたにもかゝらず、たつた四人の方が書いて下さつただけでした。あんなに多勢いるのに。時間の余裕だつて充分あつたのに(一月半)。書いてくれるだけの熱のある人は、一月の終りには殆ど出して下さいました。(勿論例外もあるけれど)それでも、彼等の良心、誠意を期待して(出してくれない人の)一ヶ月あまり待ちました。でも結局無駄でした。こういう人達には、いくら催促をしても無駄なのです。そうそう待つてもいられないので、仕方なく原稿をしめ切つて編集をはじめましたが、編集になれないのと、原稿が片よつている為、盛り上りのないダッシュになつて了つたのです。又、編集部員の方々も、あまり協力的だつたとは云えない様です

。私一人ヤキモキしても、積極的な協力が殆ど得られなかつた為、よし、それなら一人でやつてやると思つてやつたのです。自分の力を過信したのではなく、そうしたければ、とても三月に発行する事は出来なかつたから。しかしやはりこれは失敗でした。編集という大仕事を、一人でやる、などというのは、不可能に近い事を、しみじみ悟りました。

次号こそは皆さんの御協力を期待し、私自身も、もつともつと努力する事をお約束します。私の期待をどうぞ裏切らないで皆がよりよいDASHを作るために積極的に力を加して下さる様、心から祈ります。

『DASH』才九号

昭和三十六年四月一日印刷
昭和三十六年四月十日発行

発行所 栄光学園蹴球部

編集員 吉川 威

顧問 中前 峻

表紙 越智 信利

印刷所 横浜市金沢区六浦町四八四三

電話 有 (7) 八〇八〇番